

戦争体験「語り」の継承とアーカイブ(11)

— 広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」を事例として —

外 池 智

(秋田大学大学院教育学研究科)

Study about inheritance of telling war experience (11) - Hiroshima "a-bomb survivors legend" and Nagasaki "exchange evidence" as a case study-

TONOIKE, Satoshi

Abstract

This study is in published studies on the development of peace education of the next generation using hierarchical archiving working from 2015, continuing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the 2009 fiscal year, 2012 year telling.

Age of war after World War II 78 years have passed, and talk about the experience of war if 10 -year-old, no longer the population total population 5%. Narrative in such a situation, a direct war experience, not by using the hierarchical archive should be called "peace education of the next generation" so to speak, practice is ever-changing and expanded.

Nagasaki has been approached from the city of Hiroshima last year continue to be tackled from fiscal year 2012, such circumstances "a-bomb survivors tradition" and 2014 year "Family survivors" and take "Exchange witnesses".

Key Words: Study about inheritance of telling war experience, Practice of Hiroshima "a-bomb survivors legend", Nagasaki a-bomb experience about (exchange evidence) promotion project

1. 本研究の目的

本研究は、筆者が研究代表を務めてきた以下の一連の研究の継続研究であり、その一端を発表するものである。

- 2009-2011 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」(課題番号: 21530972)¹
- 2012-2014 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」(課題番号: 24531174)²
- 2015-2017 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」(課題番号: 15K04475)³
- 2018-2020 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用」(課題番号: 18K02606)⁴
- 2022-2024 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「地域における継承的アーカイブを活用した『次世代の平和教育』の構築」(課題番号: 22K02622)

戦後 78 年の歳月が経ち、戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に 10 歳とすれば、もはやその人口は全人口の 5% 以下となった。こうした状況の中、あの貴重な体験や記憶を残し、継承していこうとする試みが全国様々な地域で、そして多様な方略で続いている。さらに教育現場においても、直接的な戦争体験の「語り」ではなく、そうした継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育⁵」と呼ぶべき実践が次々と展開されている。

筆者は、これまでの研究で資料 1 の様な戦争体験の「語り」の継承の取り組みを取り上げ、調査・検討をしてきた。この内、先駆的な試みである広島市「被爆体験伝承者」については、第 1 期生が修了した 2015 (平成 27) 年から、実際に伝承者を秋田大学にお呼びし、講話をしていただいている。さらに、翌 2016 年 (平成 28) 年からは長崎市「家族証言者」「交流証言者」の方もお呼びしている。

本稿では、今回で 9 回目となった秋田大学での講話で、広島市「被爆体験伝承者」である森河伸子氏 (講話時 67 歳) と長崎市「交流証言者」である堀田雄二氏 (講

資料1 これまで取り上げてきた戦争体験「語り」の継承事業

	事業名	事業主体	期間
広島市 (3件)	・「原爆遺跡フィールドワーク」	原爆遺跡保存運動懇談会	1990-
	・「ヒロシマ ピースボランティア」事業	広島平和文化センター	1998-
	・「被爆体験伝承者」養成プロジェクト	広島市市民局	2012-
長崎市 (3件)	・「青少年ピースボランティア」事業	長崎市	2002-
	・「被爆体験記朗読事業（朗読会／朗読ボランティア育成・派遣）」	国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館	2011-
	・長崎市『「語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）」推進事業』	長崎市被爆継承課平和学習係	2014-
沖縄県 (4件)	・「次世代プロジェクト」	ひめゆり平和祈念資料館	2002-
	・「ボランティア養成講座」	沖縄県平和祈念資料館	2004-2006
	・「南風原平和ガイド養成講座」	南風原町	2007-
	・「子や孫に語り継ぐ平和のウミイ事業」	沖縄県平和祈念資料館	2012-2013
国立市 (1件)	・「くにたち原爆体験伝承者」育成プロジェクト	国立市市長室平和・ダイバーシティ推進係	2014-2018
昭和館 (1件)	・戦中・戦後の労苦を伝える語り部事業	昭和館	2016-

資料2 秋田大学にこれまでお呼びした講話者（敬称略）

年度	広島市 「被爆体験伝承者」	長崎市	
		「家族証言者」	「交流証言者」
2015(平成27)	高岡昌裕(36)		
2016(平成28)	檜原泰一(40)	佐藤直子(52)	
2017(平成29)	藤井幸恵(73)		松野世菜(19)
2018(平成30)	山岡美知子(67)	平田周(59)	
2019(令和1)	石綿浩一(55)		田平由布子(26)
2020(令和2)	清野久美子(62)		中島麗奈(19)
2021(令和3)	佐々木佐久子(71)		水谷遥(20)
2022(令和4)	山口恵司(71)	大越富子(74)	
2023(令和5)	森河伸子(67)		堀田雄二(61歳)

・()内は、講話時の年齢

話時61歳)の「語り」を取り上げたい。これまでの分析と同様に、文字起こしによるプロット毎の「語り」の時間と文字数からの量的分析、また聴講者からのアンケート結果（自由記述）からの質的分析により検討していきたい。

2. 講話の日程と講話者の略歴

今回の2023（令和5）年度の講話は、7月26日（水）に実施した。主な日程は以下の通りである。講話時間は、基本的に質疑応答の時間を含めて広島市「被爆体験伝承

者」講話は1時間、長崎市の場合は40分程でお願いしている。

16：00～16：10	受付
16：10～16：30	基調報告（外池智）
16：30～17：30	広島市「被爆体験伝承者」講話（森河伸子氏）
17：30～17：40	休憩
17：40～18：20	長崎市「家族証言者」講話（堀田雄二氏）

講話実施の順に、まず広島市「被爆体験伝承者」の森河伸子氏の略歴について取り上げる⁶。森河氏は、1956年（昭和31）年広島市生まれで被爆二世である。2008（平成20）年に、母の被爆体験を自らが描いた絵本『あの日を、わたしは忘れない』を出版したのを機に、母自身が被爆証言活動を始め、森河氏はその英語通訳として支えた。2012（平成24）年に、広島市が開始した「被爆体験伝承者養成事業」に応募し、3年間の研修を経て2015（平成27）年4月に、広島平和文化センターより「被爆体験伝承者」を委嘱された。第1期生である。それからは、母の被爆体験と被爆の実相を日本語と英語で伝える活動を行っている。2023年（令和5）年4月に新設された「家族伝承者」としても活動を始めている。また「被爆証言の会」の一員でもあり、修学旅行生を対象とした被爆体験活動や平和学習ガイドにも携わっている。

次に、長崎市「交流証言者」の堀田雄二氏の略歴について取り上げる⁷。堀田氏は1962（昭和37）年7月、佐賀県唐津市生まれである。2021（令和3）年までの35年間、佐賀県の中学校社会科教員として勤務した。現職の頃から長年にわたり平和教育に携わり、退職後もライフワークにしたいと思い、長崎平和推進協会に入会した。約2年間の研修、聞き取り調査を経て、被爆者丸田和男さんの「交流証言者」をしている。堀田氏の反戦、平和への思いの原点は2点ある。1点目は、母の存在である。終戦時、母は15歳で、朝鮮から命からがら逃げてきた引揚者であった。その頃の体験を、幼い頃より本当によく語ってくれたという。2点目は、立花隆氏が「皆さんは近い将来、必ず～昨日、最後の被爆者の方が亡くなりました～このニュースに向き合う事になる」と言われた、その時の衝撃が未だに忘れられない事である。今は、原爆に関する事以外に「特攻」と「水俣病」について個人的に追跡調査等を行い、中学校から依頼があれば特別授業をしている。

3. 講話の構成と概要

今回の講話も対面で、お二人ともパワーポイントを使用しながらの実施であった。

実施した講話のお二人のプロットは、以下の資料3、資料4の通りである。

資料3 森河伸子氏による広島市「被爆体験伝承者」講話 (47分55秒, 14,172文字)

- 自己紹介, イン트로ダクション
(1分34秒 (3.3%), 435文字 (3.1%))
1. 原爆投下前の広島の様子
(2分26秒 (5.1%), 741文字 (5.2%))
 2. 原爆が落とされた時の様子
(1分57秒 (4.1%), 577文字 (4.1%))
 3. 原爆の被害
(7分09秒 (14.9%), 2,098文字 (14.8%))
 4. 母の被爆体験 (24分00秒 (50.1%), 7,290文字 (51.4%))
 5. 戦後の母
(5分17秒 (11.0%), 1,585文字 (11.2%))
 6. 今なお続く核兵器の脅威
(1分14秒 (2.6%), 401文字 (2.8%))
 7. 広島復興
(3分19秒 (6.9%), 794文字 (5.6%))
 8. 教皇ヨハネ・パウロ二世の平和アピール
(59秒 (2.1%), 251文字 (1.8%))

- ・1～8のタイトルは森河伸子氏講話時使用のパワーポイント及び資料5の内容から筆者作成。

資料4 堀田雄二氏による長崎市「交流証言者」講話 (40分17秒, 9,074文字)

- 自己紹介, イン트로ダクション
(2分10秒 (5.4%), 657文字 (7.2%))
1. 丸田和夫さんの紹介
(1分23秒 (3.4%), 342文字 (3.8%))
 2. 原子爆弾について
(7分07秒 (17.7%), 1,782文字 (19.6%))
 3. 丸田和夫さんの被爆体験 (19分00秒 (47.2%), 4,230文字 (46.6%))
 4. 黒こげのご遺体写真について
(3分53秒 (9.6%), 956文字 (10.5%))
 5. 皆さん方にお伝えしたい事
(6分34秒 (16.3%), 1,107文字 (12.2%))

- ・1～5のタイトルは、堀田雄二氏講話時使用のパワーポイント及び資料6の内容から筆者作成。

講話の文字起こし本文は、資料5、資料6の通りである。実際の講話から質疑応答まで全文掲載してある。

まず講話の内容構成について、当然ながらお二人とも違いはあるが、基本的に以下の4点で構成されたい事分かる。

- ・原爆投下までの歴史的背景や生活の様子
- ・被爆の実相
- ・被爆体験の「語り」
- ・平和への願い

前述の通り、広島市「被爆体験伝承者」の第1期生が養成を修了し、講話を始め出した2015(平成27)年から秋田大学での講話を実施し、翌年からは長崎市からも「家族証言者」、そして「交流証言者」もお呼びしている。前者の事例は今年を含めて9件、後者の事例は8件になった。これらの方々の「語り」の内容構成を振り返ると、当然その方によってそれぞれの力点の違いはあるものの、基本的には前掲の4つの項目の内容で構成されていた事が見出せた。今回の講話もそうである。伝承者達の「語り」の構成は、ほぼ定型化してきたと言える。

ただし、今回の講話の特色として指摘しておきたいのは、「語り」の構成である。これまでの「語り」の構成は、上記に示した様な章立てがそのまま順番に語られる進め方であった。これを仮にチャプター型と呼んでみる。しかし、今回の森河氏、堀田氏の場合、むしろ被爆体験者の体験談そのものが「語り」の軸として展開され、その体験談に関連させながら被爆の実相やその歴史的背景が語られる構成になっていた。これを被爆体験中心軸型とも呼んでおきたい。

4. 「語り」の時間と文字数に着目した量的分析

(1) 森河伸子氏の講話の分析

次に、文字起こしをした資料5、資料6に基づいて整理した「語り」のプロット(資料3、資料4)に注目し、「語り」の時間と文字数に着目した量的分析から指摘したい。

まず、森河氏の講話は、文字起こし分の時間で47分55秒、文字数だと14,172文字であった。資料7は、秋田大学にこれまでお呼びした広島市「被爆体験伝承者」の「語り」の継承部分の時間と文字数、そしてその割合である。森河氏の講話を比較すると、これまでの講話の中では、時間も文字数もほぼ平均的な分量である事が分かる。

さて、注目したいのは、やはり被爆体験の継承部分である。まず、森河氏の講話では、自身の母の被爆体験を継承した「語り」の部分で、「4. 母の被爆体験 (24分00秒 (50.1%), 7,290文字 (51.4%))」と「5. 戦後の母 (5分17秒 (11.0%), 1,585文字 (11.2%))」、合わせれば時間で29分17秒 (61.1%), 文字数で8,875文字 (62.6%)であった。全体の6割を超えるほどである。講話者によって全体の講話時間が違うので、割合として比較すると、森河氏の場合は最も割合の高かった2020(令和2)年の清野久美子氏 (30分29秒 (82.6%), 8,041文字 (82.3%)), 2021(令和3)年の佐々木佐久子氏 (27分31秒 (67.3%), 8,284文字 (68.6%))に次ぐ3番目の割合の高さであった事が分かる⁸。さらに指摘しておきたいのは、清川氏は「3. 松島圭次郎氏の

資料7 秋田大学にこれまでお呼びした広島市「被爆体験伝承者」の「語り」の継承部分の時間と文字数

実施年	氏名	全講話時間	全文字数	「語り」の継承部分	時間	割合	文字数	割合
2015	高岡昌裕	93分46秒	23,758文字	3 被爆体験伝承講話(1)新宅勝文さんの体験	30分10秒	32.2%	8,056文字	33.9%
2016	檜原泰一	62分9秒	16,396文字	5. 被爆体験伝承講話(岡田恵美子さんの被爆体験伝承)	12分33秒	20.2%	3,379文字	20.6%
2017	藤井幸恵	46分51秒	12,444文字	2. 森田さんと2年生の被害体験	28分38秒	61.1%	7,381文字	59.3%
2018	山岡美知子	60分5秒	16,608文字	3. 当時20歳の母が見た被爆した広島の様子	10分8秒	16.9%	2,901文字	17.5%
				4. 被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた原爆孤児の事	3分46秒	6.3%	1,016文字	6.1%
				合計	13分54秒	23.1%	3,917文字	23.6%
2019	石綿浩一	60分17秒	20,868文字	3. 被爆者, 細川浩史さんの体験①	5分49秒	9.6%	1,869文字	9.0%
				5. 被爆者, 細川浩史さんの体験②	48秒	1.3%	285文字	1.4%
				7. 被爆者, 細川浩史さんの体験③	29秒	0.8%	361文字	1.7%
				8. 妹瑤子さんの日記と被爆	17分12秒	28.5%	5,830文字	28.0%
				合計	24分18秒	40.3%	8,345文字	40.0%
2020	清野久美子	36分54秒	9,775文字	3. 松島圭次郎氏の被爆体験	13分39秒	37.0%	3,725文字	38.1%
				4. 戦後の松島氏と松島氏の詩	1分57秒	5.3%	467文字	4.8%
				5. 清野氏の母の被爆前の生活	3分10秒	8.6%	839文字	8.6%
				6. 清野氏の母の被爆体験	11分43秒	31.8%	3,010文字	30.8%
				合計	30分29秒	82.6%	8,041文字	82.3%
2021	佐々木佐久子	40分53秒	12,071文字	1. 祖父の被爆体験	4分13秒	10.3%	1,268文字	10.5%
				3. 竹岡智佐子さんの被爆体験	19分7秒	46.8%	5,683文字	47.1%
				4. 私の夫の話	3分10秒	7.7%	916文字	7.6%
				5. 竹岡さんからあなたへ	1分1秒	2.5%	417文字	3.5%
				合計	27分31秒	67.3%	8,284文字	68.6%
2022	山口恵司	49分50秒	14,773文字	5. 当時18才の父親が見た被爆した広島の様子	6分01秒	12.1%	1,974文字	13.4%
				6. 川本省三さんの話	8分53秒	17.8%	2,624文字	17.8%
				合計	14分54秒	29.9%	4,598文字	31.1%
2023	森河伸子	47分55秒	14,172文字	4. 母の被爆体験	24分00秒	50.1%	7,290文字	51.4%
				5. 戦後の母	5分17秒	11.0%	1,585文字	11.2%
				合計	29分17秒	61.1%	8,875文字	62.6%

被爆体験」と「6. 清野氏の母の被爆体験」, 佐々木氏の場合は「1. 祖父の被爆体験」「3. 竹岡智佐子さんの被爆体験」「4. 私の夫の話」と言う様に複数人の被爆体験を語っていたのに対し, 森河氏の場合は自身の母親の被爆体験のみの「語り」となっており, 単独人での被爆体験伝承の「語り」としては, 最も割合の高い「語り」となっていた事が分かる。

さらに指摘しておきたいのは, 前述した「語り」の構成の特色である。いわば被爆体験中心軸型といった構成で, これまでのチャプター型とは違った「語り」の構成であった。今回の森河氏の場合, 「語り」の構成としては資料3に示した通り, 確かに1～7のチャプターになっているのだが, 「語り」の実際としては, 被爆体験の継承部分, すなわち「4. 母の被爆体験」と「5. 戦後の母」を軸としながら, 関連部分で被爆の実相や歴史的背景といった事実的「語り」⁹や現象的「語り」¹⁰といった説明的語りを織り込んでいく「語り」となっていた。

これと関連して指摘しておきたいのは, 「4. 母の被爆体験」をこれまでの被爆体験伝承者講話より“追体験”的に構成していた点である。これまでの講話でも, 地図を活用し, 被爆体験者のその時の足跡をたどりながら広島市の原爆投下直後の様子を描いていく様な「語り」は度々なされてきた。そして, それが聞き手にとって「語り

が鮮明である」や「まるで実際に体験したような」という感想を持たせていた。しかし, 今回の森河氏の場合は, パワーポイント資料で「母がたどった道」として①から⑥までの地図を示しながら, より追体験的な「語り」の構成になっていたのである。地図として, 被爆体験者の足跡を6点も示したのは森河氏が最も多い。この点も, やはり今回の森河氏の語りの特色として指摘しておきたい。

(2) 堀田雄二氏の講話の分析

一方, 堀田氏の講話は文字起こし分の時間で40分17秒, 文字数で9,074文字で, やはりこれまでにお問い合わせした長崎市「家族証言者・交流証言者」の中ではほぼ平均的な分量であった。

そして, やはり注目したいのは被爆体験の継承部分である。資料8は, 秋田大学にこれまでお呼びした長崎市「家族証言者・交流証言者」の「語り」の継承部分の時間と文字数とその割合である。堀田氏の場合は, 「1. 丸田和夫さんの紹介(1分23秒(3.4%), 342文字(3.8%))」と「3. 丸田和夫さんの被爆体験(19分00秒(47.2%), 4,230文字(46.6%))」であり, 合わせると時間で20分23秒(50.6%), 文字数だと4572文字(50.4%)であった。全体の半分程の分量である。講話者によって全体の講話時間が違うので, やはり割合で

資料 8 秋田大学にこれまでお呼びした長崎市「家族証言者・交流証言者」の「語り」の継承部分の時間と文字数

実施年	氏名	全講話時間	全文字数	「語り」の継承部分	時間	割合	文字数	割合
2016	佐藤直子(家)	49分56秒	11,300文字	3. 父池田早苗氏の紹介	4分00秒	8.0%	903文字	8.0%
				4. 紙芝居「原爆でみんな死んでいった 池田早苗さんの証言から」	13分20秒	33.4%	2,572文字	22.8%
				5. 紙芝居の補足	3分50秒	7.7%	1,010文字	8.9%
				6. 戦後の暮らし	11分48秒	23.6%	3,185文字	28.2%
				合計	32分58秒	66.6%	7,670文字	67.9%
2017	松野世菜(交)	36分45秒	8,969文字	3. 山脇佳朗さんの被爆体験	17分20秒	47.2%	5,081文字	56.7%
2018	平田周(家)	46分40秒	9,969文字	1. 祖父松尾敦之の肉声	1分25秒	3.0%	337文字	3.4%
				3. 祖父松尾敦之の紹介	2分05秒	4.5%	469文字	4.7%
				4. 松尾敦之の日記による被爆体験	33分00秒	70.7%	6,850文字	68.7%
				5. 母の戦後と私	5分20秒	11.4%	1,117文字	11.2%
				合計	40分40秒	87.3%	8,773文字	88.0%
2019	田平由布子(交)	33分8秒	6,819文字	2. 被爆者である吉田勲さんの紹介	1分36秒	4.8%	575文字	8.4%
				4. 吉田勲さんの被爆体験	3分29秒	10.5%	969文字	14.2%
				5. 戦後の吉田勲氏の暮らしと核廃絶活動	7分59秒	24.1%	1,625文字	23.8%
				合計	13分4秒	39.4%	3,169文字	46.5%
2020	中島麗奈(交)	27分	8,482文字	2. 信子さんの紹介と被爆前の暮らし	3分13秒	11.9%	1,132文字	13.3%
				3. 信子さん自身の被爆体験の「語り」(信子さん自身の動画)	5分44秒	21.2%	1,289文字	15.2%
				4. 信子さんの被爆体験(中島氏による)	10分3秒	37.2%	3,473文字	40.9%
				5. 終戦後の信子さん(中島氏による)	2分11秒	8.1%	789文字	9.3%
				6. 終戦後の信子さん(信子さん自身の動画)	2分52秒	10.6%	795文字	9.4%
				合計	24分3秒	89.1%	7,478文字	88.2%
2021	水谷遥(交)	25分41秒	7,504文字	1. 池田道明さんの被爆体験	19分4秒	74.2%	5,130文字	68.4%
				2. 池田道明さんがお母さんに聞いた話	1分5秒	4.2%	512文字	6.8%
				3. 池田道明さんの願い	2分3秒	8.0%	608文字	8.1%
				合計	22分12秒	86.4%	6,250文字	83.3%
2022	大越富子(家)	30分04秒	6,708文字	3. 家族の8月9日	8分03秒	26.8%	1,830文字	27.3%
				4. 戦後の家族	8分40秒	28.8%	2,054文字	30.6%
				合計	16分43秒	55.6%	3,884文字	57.9%
2023	堀田雄二(交)	40分17秒	9,074文字	1. 丸田和夫さんの紹介	1分23秒	3.4%	342文字	3.8%
				3. 丸田和夫さんの被爆体験	19分00秒	47.2%	4,230文字	46.6%
				合計	20分23秒	50.6%	4,572文字	50.4%

・「家」は家族証言者、「交」は交流証言者である。

比較すれば過去 3 番目の短さであった。

堀田氏の特色も、前述した森河氏と同様にチャプター型というより、被爆体験中心軸型の構成になっていた点是指摘しておきたい。被爆体験者である丸田さんの話が中心で構成されつつも、関連する部分で被爆の実相や歴史的背景を織り込む構成になっていた。

また、堀田氏の場合は、丸田氏本人の動画も「語り」の中に織り込んで構成していた点も特色ある点である。被爆体験者本人の動画を講話の中に構成する手法は、広島市「被爆体験者」講話には見られない、長崎市「家族証言者」「交流証言者」のみの特色である。こうした手法は、今回の堀田氏のみではなく、2017（平成 29）年に「交流証言者」としては初めて秋田大学に及びした松野世菜氏や 2019（令和 1）年に及びした田平由布子氏にもみられた手法である。

さらに加えたいのは、堀田氏の「語り」の巧みさである。オリジナルの被爆体験者に成り切り、「語り」の抑揚や表現、擬音の使い方や方言、間の取り方等、話術が実に巧みで、学生との質疑応答でも落研に所属していたのかとの質問が出るほどであった。この事は、後に詳述

する様に学生の感想にも表れている。ご本人は、30 年以上にわたり中学校の社会科の教員をお勤めになり、その中で培った話術ではないかとの事であった¹¹。しかし、聞き手によってはオーバーとも受け取れるその「語り」は、長崎市「交流証言者」養成課程では、酷評される事もあったという¹²。

5. パワーポイント資料の分析

次にパワーポイントの内容について取り上げたい。初めて秋田大学に伝承者をお呼びした 2015（平成 27）年の高岡昌裕氏は例外として、その他の伝承者は、講話の際に必ず多くのパワーポイント資料を活用していた。すなわち、「語り」そのものだけではなく、視聴覚資料として「語り」を補っていたのである。ここでは、これまでと同様に、そうしたパワーポイント資料の特色を分析していきたい。

（1）森河伸子氏のパワーポイント資料

まず森河氏は全部で 84 枚の資料を使用していた。その内訳は、多い順に写真¹³29 枚（34.5％）、絵画 25 枚

(29.8%)，文字¹⁴12枚(14.3%)，地図11枚(13.1%)，モデル図4枚(4.8%)，グラフ1枚(1.2%)，年表1枚(1.2%)，写真+モデル図1枚(1.2%)で，写真と絵画といった視覚資料で2/3ほどを占めていた。

資料9は，これまでの広島市「被爆体験伝承者」が講話時に使用していたパワーポイント資料の内訳である。資料の総数では，これまで最も多かったのは2018(平成30)年の山岡美知子氏で162枚であった。ただし，実際の講話時ではこれを全て使用したわけではない。そして，2番目は2022(令和4)年の山口氏で88枚であった。今回の森河氏は，84枚で3番目に多い数であった。森河氏も同様に，実際の講話時では84枚全て使用したわけではない。

その内訳の特徴としては，やはり絵画の活用であろう。量的には，割合の多い順に2019(令和1)年の石綿浩一氏の37枚中13枚(35.1%)，2020(令和2)年の清野久美子氏の70枚中21枚(30.0%)に次ぐ3番目の割合の高さで，84枚中25枚(29.8%)であった。森河氏

の母が絵本として被爆絵画を残したエピソードもあり，学生達にも多くの感想があった。

(2) 堀田雄二氏のパワーポイント資料

一方の堀田氏は，全部で43枚の資料を使用していた。その内訳は，多い順に写真22枚(51.1%)，文字13枚(30.2%)，絵画3枚(7.0%)，手書き地図2枚(4.7%)，地図1枚(2.3%)，新聞1枚(2.3%)，動画1枚(2.3%)で，写真が半数を占めた。

資料10は，これまでの長崎市「家族証言者・交流証言者」が講話時に使用していたパワーポイント資料の内訳である。総枚数では，2018(平成28)年の平田周氏の49枚に次ぎ，堀田氏は43枚で2番目の多さである事が分かる。

その内訳の特徴としては，まず写真(22枚(51.1%))に次いで多く使用された文字資料(13枚(30.2%))である。例えば，「3本の毒の牙」や伝承した丸田氏の川柳等，実に達筆な文字資料が一面に提示されていて，学

資料9 広島市「被爆体験伝承者」のパワーポイントの内訳

実施年度	氏名	写真	絵画	動画	モデル図	マンガ	ポスター	写真+絵画	地図	手書き地図	写真+地図	写真+モデル図	新聞	グラフ	統計	年表	家系図	文字	合計
2015 (平成27)	高岡昌裕 (36)	2 (50.0%)	2 (50.0%)																4
2016 (平成28)	榎原泰一 (40)	29 (58.0%)	7 (14.0%)															14 (28.0%)	50
2017 (平成29)	藤井幸恵 (73)	18 (29.5%)	18 (29.5%)						8 (13.1%)		1 (16.3%)							16 (26.2%)	61
2018 (平成30)	山岡美知子 (67)	87 (53.7%)	12 (7.4%)		18 (11.1%)			3 (1.9%)	8 (4.9%)		2 (1.2%)			3 (1.9%)				29 (17.9%)	162
2019 (令和1)	石綿浩一 (55)	17 (45.9%)	13 (35.1%)					1 (2.7%)	1 (2.7%)					1 (2.7%)				4 (10.8%)	37
2020 (令和2)	清野久美子 (62)	36 (51.4%)	21 (30.0%)						8 (11.4%)	2 (2.9%)	2 (2.9%)							1 (1.4%)	70
2021 (令和3)	佐々木佐久子 (71)	22 (32.4%)	19 (27.9%)						10 (14.7%)	1 (1.5%)				1 (1.5%)				15 (22.1%)	68
2022 (令和4)	山口恵司 (71)	47 (53.4%)	9 (10.2%)		2 (2.3%)			2 (2.3%)	3 (3.4%)					4 (4.5%)	1 (1.1%)			20 (22.7%)	88
2023 (令和5)	森河伸子 (67)	29 (34.5%)	25 (29.8%)		4 (4.8%)				11 (13.1%)			1 (1.2%)		1 (1.2%)	1 (1.2%)			12 (14.3%)	84

・()内は，講話時の年齢
・写真，絵画，地図，グラフ等は，文字での説明文がある場合も含んでいる。

資料10 長崎市「家族証言者・交流証言者」のパワーポイントの内訳

実施年度	氏名	写真	絵画	動画	モデル図	マンガ	ポスター	写真+絵画	地図	手書き地図	写真+地図	写真+モデル図	新聞	グラフ	統計	年表	家系図	文字	合計
2016 (平成28)	佐藤直子 (52) 家	11 (31.4%)	17 (48.6%)						1 (2.9%)		1 (2.9%)						1 (2.9%)	4 (11.4%)	35
2017 (平成29)	松野世菜 (19) 交	13 (46.4%)	1 (3.6%)						3 (10.7%)					1 (3.6%)				9 (32.1%)	28
2018 (平成30)	平田周 (59) 家	14 (28.6%)				8 (16.3%)								1 (2.0%)			1 (2.0%)	25 (51.0%)	49
2019 (令和1)	田平由布子 (26) 交	27 (62.8%)					1(2.3%)		6 (14.0%)		1 (2.3%)		1 (2.3%)	1 (2.3%)		1 (2.3%)		5 (11.6%)	43
2020 (令和2)	中島麗奈 (19) 交	9 (56.3%)															1 (6.3%)	6 (37.5%)	16
2021 (令和3)	水谷遙 (20) 交	3 (37.5%)						1 (12.5%)	1 (12.5%)									2 (25.0%)	8
2022 (令和4)	大越富子 (74) 家	14 (66.7%)							1 (4.8%)									6 (28.9%)	21
2023 (令和5)	堀田雄二 (61) 交	22 (51.1%)	3 (7.0%)	1 (2.3%)					1 (2.3%)	2 (4.7%)			1 (2.3%)					13 (30.2%)	43

・()内は，講話時の年齢
・「家」は家族証言者，「交」は交流証言者
・写真，絵画，地図，グラフ等は，文字での説明文がある場合も含んでいる。

生達の感想にも強い印象を残した。

さらに、加えておきたいのは、前述した動画の使用である。繰り返しになるが、広島市「被爆体験伝承者」には見られない、長崎市だけの特徴である。

6. 参加者の感想による質的分析

参加者は、秋田大学教育文化学部の社会科教育の免許取得科目を受講している学部生 25 名、大学院生 1 名、教員 2 名、NHK 記者 1 名の合計 29 名であった。

聴講したアンケートとして 2 点、「○実際にそれぞれの『語り』を聞いた感想・意見等をお聞かせください。1. 広島市『被爆体験伝承者』講話、2. 長崎市『交流証言者』講話」を記入してもらった（資料 11 参照）。回収数は、「1. 広島市『被爆体験伝承者』講話」「2. 長崎市『交流証言者』講話」とともに学生 25 名と大学院生 1 名の合計 26 件であった。こうしたアンケート結果について、記述の内容から質的分析を試みたい。

（1）森河伸子氏の講話への感想・意見

まず、広島市「被爆体験伝承者」森河伸子氏の講話への感想・意見について、多かった順に 3 点取り上げたい。

まず、最も多かった感想は、こうした被爆体験を受け継ぎ、今後も伝えていきたいとの感想で、26 件中 13 件¹⁵ (50.0%) だった。例えば、(1-3)「この体験を聞くことができた自分たちはさらに次の世代に伝えていく義務が生じたとも思うので、特に今後教育の現場で伝えられるようにしていきたいと感じた」、(1-11)「私も将来、教育という立場から平和に関わるうえで、戦争を起こさないという意識を形成するための手立てを検討していきたい」、(1-13)「昨年も、この被爆体験講話を受けて感じることを考えることが沢山あったが、伝承者の方一人一人のお話はもちろん違ってくるし、伝わってくる思いや伝えたい思いもその人それぞれだと思うので、こういった講話や伝承を多くの人から聞き、繋いでいく行動がとても大切なのだと思った」等の感想である。講話者の話そのものから、被爆の実相を伝えていく事が大切だと綴るだけではなく、聴講者の学生達は基本的に社会科教育に関わる教員を目指しているの、やがて教員になる、授業をするといった教育実践的文脈でも、伝えてく、教えていく事の大切さを述べている事が分かる。必然的に、毎年多く見られる感想である。

次に多かった感想は、講話中に使用された絵画に関する感想で、26 件中 8 件¹⁶ (30.8%) だった。例えば、(1-5)「原爆が落とされた際の絵は当時の状況だけでなく、その瞬間の感情も込められているような気がしてとても印象に残っている。教員を目指している立場からして戦争に関する授業などで使われるのは基本的に写真や映像だ

が、当時を想起して描かれた絵にも写真や映像にはないような教育的効果があるのではないかと感じた」、(1-14)「お母様の貴重な体験と絵を見聞きし、その残酷さと非現実的な状況を想像して胸が痛くなりました。特に、中学生が眠るように死んだまま積み上げられた絵を見たときには、本当に人かと、実際の現場をみたらきつと頭から今も離れないだろうと大きな衝撃を受けました」、(1-19)「お母さまが描かれた、亡くなった中学生が材木のように積み重なっていた絵が印象的だった。あのような絵を描かれるほど悲惨な状況だったのだと想像がついた」等の感想である。森河氏の母親が描いた絵本に関する感想も 2 件¹⁷ あり、合わせると 26 件中 10 件 (38.5%) を占めた。前述した様に、森河氏は全部で 84 枚のパワーポイント資料を使用していた。その内訳では、写真と絵画といった視聴覚資料で 2/3 ほどを占めていた。周知の通り、特に広島の場合は原爆絵画の活用には特色があり¹⁸、これまでの講話でも資料 9 に示した通り、割合の多い順に 2019 (令和 1) 年の石綿浩一氏の 37 枚中 13 枚 (35.1%)、2020 (令和 2) 年の清野久美子氏の 70 枚中 21 枚 (30.0%) と活用されてきた。森河氏は、これらに次ぐ 3 番目の割合の高さであった。また、こうした写真や絵画は、被爆者自身が写り込んでいるものではなく、また被爆者自身が描いたものではない。被爆体験の内容に合わせて、膨大な資料から講話者自身が選んだものであるという¹⁹。こうした写真や絵画は、広島市「被爆体験伝承者」の講話では度々活用される資料で、“集団的記憶”としての被爆の実相が伝承者の講話でも大いに活用されている事が分かる。

次に、3 番目に多かったのは「平和」とは「明日がある事」についての感想である。26 件中 6 件²⁰ (23.1%) だった。例えば、(1-4)「私が森河さんに『平和とは何か』について質問すると、『明日があること。それまでの当たりまえがあること。』と回答してくださった。これまでの日常が平和であったと仮定して、平和を構築していくためには、つまり『明日』が来るためには、戦争体験の継承に加えてどのようなことが必要なのかを考えていきたいと思った」、(1-10)「もう一つ印象に残ったのは、『平和』とは何かについてお話しされたことだ。『平和』とは何かについて他の授業内で考えることはあった。しかし、『平和』とは明日があるということについてとても納得した。私たちが、当たり前前に大学にきて、友達と学食を食べた後にアイスを片手に他愛もない会話をする当たり前前日常を次の日もできるということが『平和』だととても強く感じた。当たり前前の日々を繰り返し送ることができるということが『平和』だと感じた」、(1-15)「『平和というのは、明日があること』という言葉がとても印象に残っている。いつも来る毎日が当然で

はなく、日常の大切さを実感した」等の感想である。これまでの講話でも、「平和とは何か」との問いかけは、講話者から学生達に投げかけられてきた言葉であり、またこうした講話自体を聴講して考えざるを得ないテーマである。学生達の感想にも表れている通り、森河氏の回答は学生達の心に響いた回答であった。さらには、次の講話者であった堀田氏自身も大変共感していたので、学生達の印象に残ったのであろう。

（2）堀田雄二氏の講話への感想・意見

次に、長崎市「交流証言者」堀田雄二氏の講話への感想・意見について、多かった順に3点取り上げたい。

まず、圧倒的に多かったのは、講話の最後に実施したパフォーマンスに関する感想である。広島と長崎に投下された原爆で亡くなった21万4千人になぞらえて印刷した星の巻物を広げて見せたのである。26件中18件²¹ (69.2%)であった。例えば、(2-2)「今回の講話の中で特に心に残った部分は、最後の『星』の数を実際に視覚的に体感することができた点でした。やはり〇〇万人という数を聞いても、なかなか実感がわかないということは、これまでの戦争学習において感じていたことでした。今回の講話で、実際に星の数を視覚的に体感できたことは、原子爆弾による被害に対する認識が大きく変わるきっかけになったと感じています」、(2-21)「今回のお話で印象に残ったのは、最後の21万4千の『星』だ。一枚ずつ紙が出てくるたびに、視覚的に犠牲者を感じ取ることができ、このことで、戦争を絶対に起こしてはいけなし、このたくさんの『星』の思いを背負って、戦争の恐ろしさ・悲惨さを知り、伝えていかなければならないと強く思った」、(2-22)「私にとっては、最後の星の巻物を解いていったのが印象的だった。星一つ一つに家族や友達、人生があると思うとしたものの、紙を出していくうちにやはりただの星の数という認識に塗り替わっていった、大量の人の死は人を数としか見られなくなるようにするということを実感して恐ろしさを感じた」等の感想である。戦没者の数は、悲惨な状況を示す客観的情報の一つとして提示される場合が多いが、それを実感を持って伝える事は容易ではない。堀田氏の場合は、広島と長崎の原爆によって1945（昭和20）年12月までに亡くなったとされるそれぞれ14万人と7万4千人、合わせて21万4千人の方々を星としてプリントし、それを巻物にして実際に披露して見せた。これまでの社会科教育でも、例えば奈良の大仏の実寸を校庭に再現したり、馬の高さを実感するために跳び箱を用意して見せたりと、数値やデータを体感的に実感させる工夫がなされてきた²²。堀田氏自身も長年中学校の社会科教員として教壇に立っており、そうした履歴がこうした工夫

につながったのであろう。

次に2番目に多かった感想は、堀田氏の「語り」の巧みさに関する感想で、26件中12件²³ (46.2%)であった。(2-12)「堀田さんの語り口調がとても印象的だった。半分芝居がかっているゆえに、児童生徒にとってはとても分かりやすいのだと思う。質疑応答であったように、あれが話し方の訓練の賜物だと感じた」、(2-20)「堀田さんのお話を聞いて、話し方が素晴らしいと感じた。聞いている方が吸い込まれるような話し方だったので、私も努力して堀田さんのような話し方を身に付けたいと感じた」、(2-24)「堀田さんの講和は丸田さんになりきっての語りはとても印象的でした。1945年の8月9日の長崎に自分がまるでいるような臨場感が終始ありました」等の感想である。繰り返し述べている様に、堀田氏の教員経験の賜物であろう。いわゆる指導困難校にも勤務なさっていた経験から、如何に生徒達を引き付けるか、そうした日々の取り組みから鍛えられた話術の結果である。

3番目に多かった感想は、こうした被爆体験を受け継ぎ今後も伝えていきたい、授業実践したいとの感想で、26件中8件²⁴ (30.8%)であった。例えば、(2-7)「怖いとか悲しい、戦争はよくないと思う気持ちが実際に一人一人の平和を尊ぶ価値観や生き方につながるように、学校の授業でも実践したいと思った」、(2-8)「この命を今後もつないでいくために、戦争を二度と起こさないという意識を持ち、これから関わっていく人に戦争をしてはいけないということを伝えていく必要があると感じた」、(2-9)「明日が来ることのありがたさを日々噛みしめながら、将来教師として原爆の悲惨さを後世に伝えていく責務を果たしていきたいと感じた」等の感想である。森河氏の感想でも述べてきた通りで、学生達は基本的に社会科教育に関わる教員を目指している。被爆体験の継承だけではなく、教育実践の文脈で捉えている事が見て取れる。

また、同数で3番目に多かった感想は、「想像」についても感想で、やはり26件中8件²⁵ (30.8%)であった。例えば、(2-1)「私達は戦争の悲惨さというものを、体験できない、でも想像することはできるというお話がとても印象に残っています」、(2-4)「『平和について私たちに何ができると考えるか』について質問すると、『想像すること』であると回答してくださった。この『想像』について、私も原爆体験のような悲惨な戦争を想像し、共感することが平和を構築する第一歩であると考えます。私たちの命を明日につなげるためには、その先にどのようなことが必要なのか考えさせられた」、(2-5)「戦争を体験できない今は想像力を働かせることが大事というお話もあった。全くその通りで、私たちはこうした機会を

通して戦争の話を書くことしかできない。その中でいかに想像力を働かせるかが戦争に対してより関心を持つかにつながると思ったし、社会を担う国民として平和を築こうとする意識を育むことができるのではないかと思った」等の感想である。講話後の質疑応答の部分で、(2-4)の感想や資料6に示した通り、学生からの質問に対して堀田氏が答えた内容である²⁶。講話そのものの内容ではないが、学生たちの印象に残ったようである。歴史教育の中で、実際に過去に起きた歴史的事象を現代に生きる我々は体験する事はできない。そのため、歴史的思考力として、やはり「想像」する事は重要である。これもまた、堀田氏自身の教員経験の裏付けがあつての発言であろう。

7. 小括

以上、今回で9回目となる広島市「被爆体験伝承者」森河伸子氏、長崎市「交流証言者」堀田雄二氏の講話について、時間と文字数による量的分析と、聴講者による感想の質的分析を試みた。最後に、小括として伝承者養成の変化について述べていきたい。

前述した様に、広島市は2012（平成14）年度より「被爆体験伝承者養成事業」を発足させてきた。そして、発足からちょうど10年を迎えた昨年度の2022（令和4）年度から、「家族伝承者」の養成を開始している。その募集資格としては、以下の様に示されている。

被爆体験伝承者の応募資格に加え、被爆者の家族である方（家族である被爆者が、伝承する事について同意し、かつ、講話内容の確認に協力できる場合に限ります。）²⁷

家族の被爆体験の伝承を養成しようとする試みは、既

に長崎市が2014（平成16）年に「家族伝承者養成事業」として発足させてきた²⁸。そして、遂に広島市も家族伝承者の養成に乗り出したのである。こうした背景には、やはり被爆体験証言者そのものの減少があげられる。2012（平成14）年度の事業発足当初では、被爆証言者は23人が登録されていた²⁹。しかし、2023（令和5）年度現在では10人にまで減少してきている³⁰。広島市の養成事業として登録されている被爆証言者がこのような状況である事は、当然広島市全体においても被爆体験者の減少がいよいよもって深刻な状況になってきている事の表れである。広島市が、昨年度改めて「家族証言者養成事業」を発足させたのは、こうしたある意味危機的状況を受けての事である。ちなみに、その養成期間は、元来3年間という他の養成事業には見られない長さであったが、今回は被爆体験伝承者養成とともに2年間に短縮されている³¹。これもまた大きな変化である。

一方の長崎市は、発足当初は広島市とは対照的に「養成」というよりは家族証言者の「支援」とも言える関りであった³²。「証言者」がパワーポイントを使用したいのであればその作成を支援し、証言ビデオを活用したいとなれば、その撮影を補助してきた。しかし、近年はかなり厳密に被爆体験の伝承をチェックする体制に変化してきた。伝承の元となる被爆証言者と養成事業を担う行政主体である長崎平和推進協会継承課のチェック、さらには大学教員による評価も加えられるという三重のチェック体制を取るようになった³³。こうした変化は、やはり伝承による「語り」のズレやブレを極力なくす取り組みなのであろう。

いずれにしても、広島市「被爆体験伝承者」、長崎市「交流証言者」の養成は、10年の歳月を経て、新たな状況に対応している表れである。

1 その内容は、拙著『2009-2011 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用』（暁印刷、2015年）としてまとめている。

2 その内容は、拙著『2012-2014 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』（2015年、暁印刷）としてまとめている。

3 その内容は、拙著『20015-2017 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築』（2018年、八郎湯印刷）としてまとめている。

4 その内容は、拙著『2018-2020 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 地域における継承的アーカイブと学習材としての活用』（2021年、八郎湯印刷）としてまとめている。

5 「次世代の平和教育」については、前掲註3の報告書の内、「Ⅲ 次世代の平和教育」（121-232頁参照）にまとめている。その特色として、以下3点を指摘した。

(1) 継承的アーカイブの活用

(2) 戦後の平和希求活動への着眼

(3) 目的の平和教育から方法的平和教育へ

6 森河伸子氏提供資料（2023年6月6日）の「プロフィール」による。

7 堀田雄二氏提供資料（2023年6月25日）の「プロフィール」による。

8 2017（平成29）年の藤井幸恵氏は、時間の割合は28分38秒（61.1%）で森河氏と同一であるが、文字数だと7,381文字（59.3%）で割合では森河氏より低くなっている。

9 「事実は『語り』」は、語られるストーリーの主体、場、日時、そしてその時の戦局や状況といった客観的状況に関する説明的な「語り」である。これは、実際の体験者ではな

- くても可能な「語り」であり、文献等による史実研究により、より精緻な情報にする事が可能である。前掲註2の報告書の83-84頁参照。
- 10 「現象的『語り』」は、体験者のおかれた状況下で何が起きたのかを現象として語るものである。例えば、広島原爆遺跡保存運動懇談会の「原爆遺跡フィールドワーク」における高橋信雄氏の「語り」である。高橋氏は直接的な被爆者ではない。しかし、例えば広島城公園における被爆樹に関する「語り」では、爆心地からの距離、原爆が落ちた時点での温度、その熱線を浴びた時間、爆風の速さ等の客観的情報に基づき、そこで何か起きたのかを現象として語っていた。これもまた、こうした「語り」であれば体験者ではなくても語り得るものである。原爆に関わる客観的史料に基づき、いわば追体験的な「語り」により、臨場感のある「語り」を再現する事が可能である。前掲註2の報告書の83-84頁参照。
- 11 学生たちの質疑応答では、以下の様に答えている。
- 私も一生懸命話をしていました。その一瞬、一瞬が全部練習である事は間違いなく、しゃべりの練習である事は間違いなかったもので、子供たちにいかに聞いてもらうかというのは必死でした。手を変え品を変え、かなり悪い中学校とかにも転々としたのですけれども、こいつらにどうやってこっちに振り向かせるか、なんていうのはもう必死でした。そうしないともう出て行きますから、体育館から。そんなふうなところで、どうにかやろうとしていた事の連続だったのかなという感じです。ですから、特別何かをやったという事ではないです。
- 12 堀田雄二氏からの聞き取り（2023年7月26日）による。
- 13 写真、絵画、地図、グラフ等は、文字での説明文がある場合も含んでいる。
- 14 表紙、タイトルも含む。
- 15 資料11の内、1の欄の3、5、6、7、8、9、11、13、16、17、18、20、21の13件である。
- 16 資料11の内、1の欄の5、10、11、14、18、19、20、24の8件である。
- 17 資料11の内、1の欄の3、21の2件である。
- 18 広島市における「原爆の絵」の取り組みについては、例えば蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するの—ポスト戦争体験時代の歴史実践』（みずき書林、2021年）の内、「第1部 体験の非有効性はいかに乗り越えられるか」の小倉康嗣「第1章 継承とは何か—広島市立基町高校『原爆の絵』の取り組みから」、45-106頁参照。
- 19 これまでの講話者や森河伸子氏からの聞き取り（2023年7月26日）による。
- 20 資料11の内、1の欄の4、10、11、15、18、19の6件である。ただし、11は本来は森河氏の言葉であったのを堀田氏

- が共感して述べた部分を堀田氏の感想の欄に述べているので、森河氏に対する感想としてカウントしている。
- 21 資料11の内、2の欄の1、2、3、5、8、10、11、12、14、15、16、17、19、20、21、22、23、24の18件である。
- 22 例えば、これまでの秋田大学教育文化学部附属小学校の公開研究会の実践より。
- 23 資料11の内、2の欄の1、5、12、13、14、15、17、18、19、20、22、24の12件である。
- 24 資料11の内、2の欄の7、8、9、10、13、15、16、20の8件である。
- 25 資料11の内、2の欄の1、4、5、7、10、22、23、25の8件である。
- 26 「平和形成のために私たち学生ができる事についてお願いします」の質問に対して、以下の様な応答があった。
- もちろん私たち、戦争を体験することはできないわけなのです。絶対に体験はできません。できない代わりに、代わりというとなあれなのですけれども、圧倒的な想像力、もうこれしかないと思っています。圧倒的に想像しまくるのです。思いまくる。相手のこと、あるいは戦争の頃のこと、単純なようなのですけれども、とにかく想像力が我々に残された最後の手段じゃなかろうかというふうに思います。ですから被爆、ものすごく、とんでもない地獄の状況の中でも、その当時の人たちは何が起こったかも分からない、でもそこを我々にはありがたいことに想像できるのです。とにかく想像する、これしか我々に残されている手段はないと思っています。
- 27 広島市市民局国際平和推進部平和推進課「募集案内チラシ(別添1)」(2023年) (<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace329415.html>)
- 28 前掲註3報告書の内、「Ⅱ戦争体験の「語り」の継承」「2. 2016(平成28)年度 広島市『被爆体験伝承者』講話と長崎市『「語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)」推進事業」、39-87頁参照。
- 29 前掲註2報告書の内、「Ⅱ 広島事例」「1. 広島市『被爆体験伝承者』養成プロジェクト」、7-19頁参照。
- 30 広島市市民局国際平和推進部平和推進課「伝承者養成事業にご協力いただく被爆証言者一覧表(50音順)(別添3)」(2023年) (<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace329415.html>)
- 31 広島市市民局国際平和推進部平和推進課「令和5年度養成研修のスケジュール例(被爆体験証言者、被爆体験伝承者、家族証言者)(別添2)」(2023年) (<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace329415.html>)
- 32 前掲註28参照。
- 33 前掲註12の堀田雄二からの聞き取りによる。



講話開始時の森河伸子氏



講話開始時の堀田雄二氏



母を紹介する森河氏



丸田和夫氏を紹介する堀田氏

資料5 広島市「被爆体験伝承者」森河伸子氏講和文字起こし（47分55秒，14,172文字，質疑応答を除いた時間と文字数）

○自己紹介，イントロダクション（1分34秒，435文字）

○森河 はい，お願いします。皆さん，こんにち。初めまして。ただいま御紹介いただいた森河伸子と申します。被爆した家族の体験と平和への思いを次の世代に語り継ぐ家族伝承者です。どうぞよろしくお願いいたします。秋田は大雨の中で大変な中，講話をする機会をいただき感謝しています。それでは始めさせていただきます。聞こえますか。

今から78年前の1945年8月6日，人類史上初めての原子爆弾が広島に落とされました。3日後の8月9日には，長崎にも原子爆弾が落とされ，8月15日，長く苦しかった戦争が終わりました。私たちは今，戦争のない平和な毎日を送っています。当たり前のように思っているこの平和は，先の戦争で亡くなられた多くの方々の方々の犠牲の上に成り立っていることを，絶対に忘れてはいけないと思います。

それでは，これから皆さんに二つの話をします。一つ目は，広島原子爆弾被害の実態について。二つ目は，当時14歳だった私の母，河野キヨ美の被爆体験です。これから原子爆弾のことは原爆と短く呼ばさせていただきます。

1. 原爆投下前の広島の様子（2分26秒，741文字）

00:01:34

初めに，原爆投下前の広島の様子についてお話しします。現在，平和記念公園になっている辺り一帯は，原爆が落とされるまでは映画館や旅館，商店，お寺などが立ち並ぶ繁華街でした。これ，原爆投下前です。そして，たくさんの人が暮らしていました。

戦争が激しくなり，二十歳以上の男性は軍隊に行き，軍都，軍隊の街として発展した広島港からも，全国から集められた大勢の兵士が戦うために戦地へ送られました。そのため人手が足りなくなり，国は中学生にも仕事を手伝わせることにしました。中学生以上の学生が工場や農作業など，いろいろな作業に動員されることになったのです。戦争中は全ての国民が戦争に協力するよう法律で決められていました。この絵は武器などを作る軍需工場に働いていた中学生の様子です。

広島市内中心部では，多くの中学校1年生と2年生が，建物疎開作業をすることになりました。皆さん，建物疎開という言葉は聞かれたことがありますか。ほとんどないですね。建物疎開とは，空襲によって火事が起き，周りの建物に燃え広がるのを防ぐために，あらかじめ家の密集したところを強制的に立ち退かせ，壊して防火地帯の空き地を作る作業のことです。当時，日本の建物はほとんどが木造建築でした。飛行機から爆弾を落とされるとすぐに燃え広がります。火災の広がりを防ぐために，多くの家が壊されていました。皆さん，この絵を見てください。まず大人たちが柱をのこぎりで切断し，ロープを掛けて建物を引き倒します。倒れた建物の後片付けをするのが主に中学校1年生と2年生の仕事でした。暑い中，夏休みもなく，汗まみれほこりまみれになりながらも，瓦や木材，がれきなどを運び，一生懸命に働きました。当時はブルドーザーなどの重機はありません。全ての仕事は手作業でした。

2. 原爆が落とされた時の様子（1分57秒，577文字）

00:04:00

次に，原爆が落とされた時の様子についてお話しします。1945年8月6日月曜日，広島はいつもどおりの朝を迎えました。よく晴れた暑い日でした。

今の平和大通りを中心とした建物疎開の現場では，中学生たちが作業を始めるために集まっていました。点線に囲まれた白く見える辺りに集まっていました。平和大通りは平和記念公園の南側に面した広い道路のことです。戦後，建物疎開で造られた空き地を活用して，この道路は建設されました。

これが広島に投下された原爆です。長さ約3メートル，重さ約4トンで，リトルボーイと呼ばれていました。広島に投下された原爆は，ウランが核分裂する時に発生する巨大なエネルギーを用いました。爆弾には，約50キログラムのウラン235を含む濃縮ウランが詰められていたといわれていますが，実際には，そのうちのたった1キログラムにも満たないものが核分裂して爆発しました。

原爆投下の目標とされた相生橋は市内中心部にあり，上空から見るとアルファベットのTの字の形をしています。その形は分かりやすいため，原爆を落とす時の目印となりました。

午前8時15分，平和記念公園の北側にかかっている相生橋を目標に，原爆は上空9,600メートルから落とされまし

たが、目標地点より南東に約 300 メートル離れた島病院の上空 600 メートルで爆発したのです。空中の爆発点の真下の地上を爆心地と呼びます。爆心地は島病院です。

3. 原爆の被害（7 分 09 秒，2,098 文字）

00:05:57

これからは原爆の被害についてお話しします。

爆発の瞬間、強烈な熱線と放射線が放出されるとともに、周りの空気が膨張して超高圧の爆風となり広がりました。原爆は熱線、爆風そして放射線の三つの大きな力が複雑に作用して、大きな被害をもたらしました。

まずは熱線による被害についてお話しします。原爆投下後すぐに、アメリカ軍の爆撃機 B 29 エノラ・ゲイ号は、安全な場所に飛び去って行きました。投下の 43 秒後に上空 600 メートルで爆発した原爆は、直径が 400 メートルを超える小さな太陽のような火の球を作りました。その火の球から放たれた熱線により、爆心地付近の地表面の温度は、一瞬で 3,000 度から 4,000 度となりました。鉄が溶ける温度は約 1,500 度だそうです。想像してください。あの日、自分が爆心地近くにいたらどうなっていたのか。

そのような強烈な熱線により、爆心地付近で外にいた人は、一瞬で皮膚を焼き尽くされ、体の内部組織にまで大きな障害を受け、ほとんどの人が亡くなりました。

また、爆心地から 3.5 キロメートル離れたところにいた人でさえ、素肌の部分はやけどを負いました。

次は爆風による被害についてお話しします。これは爆心地から 1 キロメートル離れたところに建っていた木造の広島城天守閣です。爆風により一瞬でこのように倒壊してしまいました。なお、現在の広島城は戦後再建されたものです。爆心地から 100 メートル地点での風速は秒速約 280 メートルだったといわれています。台風の時の 10 倍くらいの風の強さです。そのようなすさまじい爆風のために、多くの人々は吹き飛ばされ、意識を失い、また建物は押しつぶされてしまいました。窓ガラスは粉々に割れて飛び散り、人々の体に突き刺さりました。

これは、爆心地となった島病院の被爆後の様子です。壁の厚さが 1 メートルもあったとされる病院も、このように破壊され廃墟となりました。病院の中にいた人は、一瞬で亡くなっています。でも皆さん、写真の右側に石の鳥居が爆風にも耐えて建っているのが見えますか。分かります。爆心地近くに建っていたので、爆風をほぼ真上から受けたため倒れなかったそうです。本当に不思議ですね。現在は広島城の東側に移設されています。

強烈な熱線と爆風により、市内中心部の広島の町は真っ赤な火の海に包まれました。火災は午前 10 時頃から午後 2 時、3 時頃を頂点に、一日中続きました。爆心地から 2 キロメートル以内の建物はほとんどが燃え尽き、わずかな鉄筋コンクリートの建物だけが焼け残りました。しかしその建物も外壁だけを残し、内部は焼き尽くされていました。

当時はほとんどの建物が木造建築でした。爆風で家が倒され、下敷きとなった多くの人が、迫りくる炎の中で助けを求めながら、生きたまま焼かれて亡くなりました。建物の下敷きとなり、身動きできない家族を置き去りにして逃げた人も多かったそうです。皆さん、想像してください。もしも皆さんの家族がそのような状況に置かれたらどうでしょう。自分のこととして考えてみてください。

そして最後は放射線による被害についてお話しします。原爆と普通の爆弾との決定的な違いは、原爆は放射線を含んでいることです。この絵を御覧ください。放射線は目で見ることもしないし、匂いありませんが、それを浴びると人間の体の中の細胞が破壊され、異常な染色体ができてしまい、遺伝子までも傷つけられて、人体に深刻な障害を引き起こす大変に危険なものなのです。

放射線には、初期放射線と残留放射線があります。

爆発後 1 分以内に放射された初期放射線によって、爆心地から 1 キロメートル以内にいた多くの人は、致命的な影響を受け、数日のうちに亡くなりました。またけがややけどもなく無傷のように見えていた人も、被爆後月日がたってから発病し、亡くなることもありました。

さらに原爆は、爆発後も残留放射線を地上に残しました。そのため、救援活動や家族、友達などを探すために、広島市内に入り被爆した人たちの中には、直接被爆した人と同じように急に発病し亡くなる人もいました。また爆発後、市内の広い範囲に夕立のような大雨が降りました。爆発の時に巻き上げられた泥やちり、火災によるすすなどを含んだ黒い粘り気のある大粒の雨で、この黒い雨の中には強い放射線物質が含まれていました。

放射線による障害は、被爆直後の吐き気や下痢、発熱、髪の毛が抜けたり、血を吐いたりなどの症状だけでなく、白血病やがんなどのように、何年もたってから症状が現れる場合もあります。この写真は、爆心地から 1 キロメートル以内にあった木造家屋内で被爆した兵士です。被爆から 12 日後、髪の毛が抜け始め、歯茎からも出血、やがて紫色

の斑点が出始め、歯茎からの出血が止まらなくなり、被爆後1カ月近くたってから亡くなりました。

原爆が落とされた時、約35万人の人々が広島市内にいたと推定されています。その中には朝鮮や台湾、中国大陸からの人々、東南アジアからの留学生やアメリカ人の捕虜なども含まれていていました。原爆によって死亡した人の数は現在でも正確には分かっていません。1945年の12月末までに、約14万人もの人々が亡くなったといわれています。

4. 母の被爆体験（24分00秒，7,290文字）

00:13:06

これからは、母の被爆体験をお話しします。

平和記念公園には、多くの被爆者が思い出したくもない、つらい記憶をたどりながら描いた絵が展示や保管されています。その絵を見て考え、そして語り伝えてほしい、と願って描かれた絵です。その中の一枚に、私の母が描いた建物疎開作業中に亡くなった中学生たちの絵があります。2002年、母が70歳になった頃、広島市と長崎市、NHKなどが共同で、市民の描いた原爆の絵の募集をしました。それまで母は被爆体験をほとんど話していませんでしたが、8月7日、原爆投下の翌日に姉を探しに行った時に見た、病院の花壇の上に、材木のように積み重ねられた中学生たちの遺体に激しいショックを受け、忘れようとしても忘れることができませんでした。その悲惨な光景を描くことを決めましたが、なかなか筆が進まず悩んでいたある日、夢の中に中学生たちが現れて、「早く僕らのことを描いてください。早く僕らの代わりに原爆のことを伝えてください」と大きな声で叫びながら走り去る夢を見ました。そしてその夢に触発されて描き上げたのがこの絵です。

その絵が原爆の絵、動員学徒の碑となり、広島赤十字病院に置かれました。

そのことがきっかけとなり、母は77歳の時に一冊の絵本『あの日を、わたしは忘れない』を出版しました。絵本を描いている時の母は、長い間絵筆を持ったことがなかった上に、被爆直後の様子を思い出し、うめき声や亡くなった人たちの様子が浮かんでくるのか、大変につらく苦しうでした。時には涙を流すこともありました。苦悩しながらも記憶を残そうとしている母の姿を見た時、私は原爆が長い間人の心を苦しめ続ける現実を知り、それまで余り聞いてこなかった母の被爆体験に向き合い、母の思いを受け継ぎ、そして語り伝えていきたいと思うようになりました。これから、母の描いた絵を紹介しながら、被爆翌日の地獄のような広島町の歩いた母の体験をお話しします。

母の絵本です。

これは母の家族の写真です。両親、祖母、兄、姉2人、弟の8人家族でした。当時、私の母きよみは14歳、中学校2年生でした。母の兄は戦争に行き、東南アジアで戦っていました。母の姉の澄子と翠です。2人とも、原爆が落とされた時は広島市内に住んでいました。上の姉の澄子は結婚して、家族と一緒に宇品というところに住んでいました。

下の姉の翠は、爆心地から1.5キロメートル離れた広島赤十字病院で看護師として働いていました。

母は、爆心地から30キロメートル離れた北部の田舎に住んでいました。

母は田舎の学校に通っていたので、広島市内の中学生のように、建物疎開作業はありませんでしたが、学校が工場になり、教室にたくさんのミシンが運び込まれ、軍の仕事を手伝うことになりました。兵隊さんのシャツやズボンなどの軍服をたくさん縫いました。学校での勉強はなく、毎日一生懸命にミシンを踏みました。当時のミシンは電気ではなく、ペダルを足で踏み動かしていました。皆さん御存じですか。

毎朝竹やりで、突き、突きと大声で叫びながらの訓練を繰り返しました。敵兵が日本に上陸したら、竹やりで戦い、のどを突き殺しなさいと先生に教えられたからです。今思えば竹やりなんかで戦えるはずもなかったのに、その時は何の疑いも持たず、先生の指示に従い、一生懸命に声をからしながら、竹やりやなぎなたの訓練に励みました。

母が生まれた1931年、中国で満州事変が起こり、1937年日本は中国と戦争を始めました。中国と戦争を続けながら、さらに日本軍は、ハワイ真珠湾のアメリカ軍基地を攻撃し、アメリカやイギリスなど連合国を相手にした太平洋戦争に突入しました。母が生まれてから子供時代、日本ではずっと戦争が続いていました。国民生活は全てが軍事優先となり、工場で生産されるものは戦争で使われるものを中心でした。お米や燃料、生活用品なども不足するようになり、十分な食べ物もなく、皆いつもお腹をすかせていました。

頭に白い鉢巻きを締め、ブラウスを着て、お母さんの着物をほどいて縫ったモンペと呼ばれるズボンをはいていました。お弁当は麦御飯に梅干だけの日の丸弁当です。とても貧しく苦しい生活でしたが、その当時の母は、日本は必ず戦争に勝つと信じた軍国少女でした。

8月6日、静かな朝でした。自宅にいた母は突然ドカーンというものすごく大きな爆発音を聞きました。それはたくさんの雷が一度に落ちたような、地面が割れたかと思うような轟音でした。家の近くに爆弾が落ちたのだと思い、

慌ててはだしで外に飛び出しましたが、何も起こってはいませんでした。不思議に思いながら庭に立っていると、山の向こうの広島に雲がもくもくと湧きあがり、みるみる不気味に広がり、巨大なきのこ雲になるのが見えました。今のようにテレビも電話もありません。何が起こったのかさっぱり分からず、大変不安な時を過ごしました。

やがて夕方になり、動き始めた汽車に乘せられて、広島からたくさんの負傷者が村の駅に戻ってきました。その人たちから、たった1発の大きな爆弾が落ちて、広島町が全滅したという話が伝わり、村中が大騒ぎになりました。当時、母の2人の姉は広島市内に住んでいました。母の両親はそのうわさを聞き、娘たちはもう死んでしまったかもしれないと思いました。そして薄暗い部屋の隅で、黙ってわらをきれいに束ね、遺骨を拾うための袋を作りました。

翌日、私の母と祖母は、母の姉たちを捜すために始発の汽車に乗りました。車中は同じように家族を探しに行く人々でいっぱいでした。

広島駅が被爆して利用できないため、一つ手前の駅で下車しました。

駅のプラットホームに降りると、動物を焼いたような、目も鼻も刺すような、ものすごい悪臭がしてきて、息がつまりそうで目も開けることができませんでした。しばらくしてようやく慣れ、目を開け周りを見て驚きました。昨日まであった広島町が消えて、広い焼け野原になっていました。まだくすぶった煙があちこちから上がっていました。真っ黒い焼け野原の向こうに、遠く瀬戸内海に浮かぶ似島が鮮やかな緑色に見えたことがとても印象に残っていると母は話します。

これが、母が見た瀬戸内海に浮かぶ島、似島です。

家族を捜す人々に押されるようにして、母たちは広島市内へと向かいました。狭い道路の反対側には、郊外へ避難する被爆した負傷者の長い、長い列が続いていました。皆髪の毛はほこりまみれのぼさぼさで、ちりちりに焼かれています。顔は大きく腫れあがり、血まみれの人もいました。着物は焼け焦げてちぎれ、半分裸のようでした。やけどをした人の皮膚が肩からめくれ、めくれた皮膚がぼろ布のように指先に垂れ下がり、うつろな表情をして両手を前に差し出したまま、そろりそろりと歩く姿は、とても同じ人間とは思えませんでした。まるで幽霊のようだったと母は話します。手を下げるとやけどでめくれた腕がこすれて、激しく痛むので、皆このように両手を前に突き出して歩いていました。

市内に入ると、がれきの散乱した道路の上にたくさんの死体が転がっていました。足の踏み場もないほどで、死体を踏まないように避けながら、またいで歩くのが大変でした。焼けた人間の体は2倍にも3倍にも膨らんで、まるで昔話に出てくる赤鬼のようでした。男性か女性かも分かりません。仰向けの死体から黒い目玉が流れ出ていました。死体の脇腹が破れて内臓が流れ出し、黄色くなっていました。手や足を宙に伸ばし、何かをつかもうとしているように見える死体もありました。口から飛び出した舌が黒こげになり長く伸びていました。真っ黒な炭の棒のように見える死体もありました。無数の死体につまずきました。母は怖くて気持ちが悪くて、母親、私の祖母にしがみついて、泣きながら歩きました。当時、スニーカーはなく母は草履をはいていました。今でも死体につまずいた時のブヨブヨとした感覚がつま先に残っていると話します。

橋を渡る時のことです。川から引き揚げられたたくさんの死体が橋の両側に並べられていました。コモと呼ばれるごごのようなものが死体には掛けられていました。

死体を見ないように橋の真ん中を渡っていた時、兵隊さん、助けてください。どなたかお願いですから、お水を飲ませてくださいと弱々しい女の人の声が聞こえました。並べられた死体の中には、まだ生きている人もいたのです。水をあげたら死んでしまうから、あげてはいけなと言われ、何もすることができませんでした。母は今でもその橋を渡る時、あの女の人の悲しい声が聞こえるような気がする話します。どうして被爆者にお水を飲ませてあげなかったかという、ひどいやけどや大けがを負い、今にも死にそうな状態でお水を飲んだ被爆者は、ほんと安心して緊張が解け、亡くなっていったのではないかといわれています。被爆者にお水を与えるとショック死してしまうといううわさが流れ、多くの被爆者がお水を求めながらも飲むことができずに亡くなりました。どうせ亡くなってしまわれるのだったら、最後にお水を飲ませてあげればよかったと母は今でも後悔しています。

真夏の太陽が照りつける暑い、暑い日でした。がれきの道を長い間歩いてようやく昼頃、母の姉の翠が働いていた病院に着きました。

爆風で窓は吹き飛び、真っ黒にすすけた病院の中はまるで地獄のようでした。たくさんの負傷者が廊下まで運び込まれ、折り重なるようにコンクリートの床の上に寝かされていました。ガラスが刺さり血まみれの女の人や子供もいました。

痛いよう、苦しいよう。先生、助けて。おかあちゃん、お水が飲みたい。兵隊さん、いつそのこと殺してくれと多

くの負傷者がうめきながらもがき苦しんでいました。その声はコンクリートの壁や床に反響して、すさまじいうなり声となって聞こえていました。母は怖くてたまりませんでした。たくさんのけが人が次から次へと運び込まれ、忙しく働いている看護師さんの1人に、やっと翠お姉さんのことを尋ねると、助けられて似島に行ったから大丈夫よと教えてくれました。当時、広島湾に浮かぶ似島には軍の施設がありました。被爆後は臨時の野戦病院となり、多くの負傷者が運ばれました。

お姉さんが助けられたと聞いて、少し安心した母たちは、病院の外に出て、はっと驚きました。玄関の横の丸い大きな花壇に、たくさんの中学生の死体が材木のように積み重ねられていました。母は思わずそばに駆け寄りました。学生服の胸に中学校の名札が縫いつけてありました。母と同じ中学生でした。被爆時、病院付近で中学生たちが家を壊して空き地を作る建物疎開の作業をしていましたから、原爆の被害にあったことも分からないまま、大量の放射線を浴びて息絶えたのでしょう。あどけない顔はまるで眠っているようでした。遺体は腐るので、その夜病院の裏でひとまとめにして焼かれました。わずか12歳か13歳の少年たちが、原爆によって一瞬に命を奪われたのです。少年たちにはたくさんの夢や希望があったと思いますが、何一つかなえることもなく、虫けらのように殺されたのです。どんなにか家に帰りたいかっただけでしょう。どんなにか家族に会いたかったことでしょう。

平和記念公園にはおよそ7万人の身元も分からず、引き取り手のない遺骨が納められた原爆供養塔があります。あの少年たちの骨は、お母さんに一度も抱かれることもなく、この供養塔の中で眠っているのでしょうか。

8月6日被爆当日、建物疎開作業の現場で働いていた中学生約8,200人のうち、約6,300人が原爆の犠牲となりました。

その後、母たちはもう一人の姉の澄子が住む宇品へと急ぎました。

途中、橋の上から川をのぞき込むと、満潮で海から押し戻されたたくさんの死体が、まるで陶器のように白くなり、上を向いたり、横を向いたり、下を向いたり、ばかりばかりと波に漂っていました。8月6日は火災から逃れた多くの人が川に飛び込み、亡くなりました。

宇品の辺りは爆風で建物は傾いたり壊れたりしていましたが、爆心地から川を隔てて4キロメートル離れていたのに、火災は起きてはいませんでした。澄子お姉さんの家も爆風で窓ガラスは割れ、天井は裂け、家は傾いていましたがお姉さんは生きていました。

母たちは、よう生きとったね。無事で良かった、良かった。本当に良かったと抱き合い泣いて喜びました。澄子お姉さんが8月6日のことを話し始めました。朝、飛行機のブーンというエンジン音を聞き、家の外に出た途端、目の前でフラッシュをたかれたような、目もくらむようなまぶしい光と、ものすごく大きな爆発音に襲われて、頭の中が一瞬真っ白になりました。気が付いた時は、爆風の衝撃で崩れ落ちてきた瓦や割れたガラスなどが目の前に広がり、まるで大きな地震の後のような光景が目の前に広がっていました。何が起こったのかまったく分からず、悪夢のような体験だった、と話しました。

夜は火災を恐れ、川にすぐに飛び込めるように、家族と一緒に山のふもとに避難し野宿したとお姉さんは話しました。

8月6日、広島町は終日燃え続けました。

澄子お姉さんと、母の家に避難してくることを約束し、別れた母たちは、電車通りに沿って歩いて帰ることにしました。ものが腐ったような、焼け焦げたような、激しい悪臭が漂う中を、数人の兵隊さんが死体を担架でとぼとぼと運び、積み重ねていました。集めた死体に油をかけて焼くのです。たくさんの死体が山のように積まれていました。暑い中、兵隊さんたちは、食べ物も飲みものもなく大変だろうなあ、と思いながら母は通り過ぎました。このような遺体の処理活動を行った兵士の中には、直接被爆はしていないのに、その後放射線の影響で発病し、亡くなった人もたくさんいます。その当時、一般の人は、原爆のことも、恐ろしい放射線を浴びていることも、全く知らなかったのです。

路面電車も爆風で飛ばされ、脱線していました。

真っ黒に焼けて、空っぽのように見えた1台の電車のそばを通った時、ふと車内を見ると、何か黒いものが幾つもぶら下がっていました。よくよく見ると、それは人間の腕でした。爆風で体からちぎれた吊革を持ったままの腕が、黒焦げの炭のようになってずらりと並んでいたのです。皆さん想像してください。人間はいないのに、腕だけがぶら下がっていたのです。母は怖くてぞっとして、本当に息が止まりそうでした。

8階建てのデパートも、コンクリートの外壁だけを残し、内部は真っ黒に焼き尽くされていました。

そのデパートの周りには、たくさんの負傷者が横たわっていました。大勢の兵隊さんも、生き絶え絶えにうずくまったり、亡くなったりしていました。

近くに陸軍の訓練場があったので、訓練中に被爆されたのでしょうか。1人の若い兵隊さんと目が合いました。何かものを言いたそうな、訴えかけるような兵隊さんの瞳を忘れられないと母は話します。今なら優しく声を掛けて、慰めてあげたり、励ましてあげたり、御家族に連絡してあげることもできたのに、と悔しく思い出されます。母は長い間、兵隊さんたちはけがややけどもなく、服も焼かれていないのに、どうして亡くなったのだろう、と不思議に思っていました。きっと大量の放射線を浴びて、致命的な影響を受けて亡くなったのだろう、と今になってやっと理解できました。

これが8月7日、母が実際に見た光景です。

こうして母たちは放射線の残った焼け跡を一日中歩き、恐ろしい放射線を体いっぱい浴びたことも知らず、また汽車に乗り、夜遅く自宅にたどり着きました。生まれて初めてこのように恐ろしく、残酷な体験をした母の心はまひし、何を見ても何も感じなくなり、デパートからはどのようにして家に帰ったのか、全く思い出せないと話します。家に帰ってからの母は、夜になると暗い部屋の中に死体のごろごろと転がっているように思えて、夜の暗闇が怖くてたまらない、そんな日が長く続きました。

8月11日、原爆投下から5日後、隣の家に住んでいた母の幼な友達の文子ちゃんが亡くなりました。広島市内の学校で被爆し、救護所にいたところをようやく親戚に探し出され、3日後に家に帰ってきました。ガラスが全身に刺さっており、高熱で息が苦しい中、家族にお別れの言葉を残しました。お母さん、泣かないで。お母さんは一人でお兄ちゃんと私を育ててくれて、日本一のお母さんだと思うよ。文子はもうすぐ死にます。死んでも私のことを忘れないように、お墓の周りにはたくさんのお花を植えてねと言いました。私の母にはきよみちゃん、小さい時から仲良く遊んでくれてありがとう。学校に行ったら、友達にも楽しい思い出をありがとうと必ず伝えてねと言い残しました。最後は、おばあちゃん、急いで下駄を履かんでね。慌てると転んでけがするよとおばあさんを優しく気遣いながら亡くなりました。皆泣きながらうなずくばかりでした。文子ちゃんの父親は、彼女が小さい時に戦争で亡くなっていました。しっかり者で家族にとってはかけがえのない子供でした。

宇品で被爆した澄子お姉さんが、家族と一緒に母の家に避難して来ました。赤ちゃんは被爆後野宿をしたため、風邪から肺炎にかかっていました。ぜいぜいと息が苦しそうなので、横に寝かせることもできず、お姉さんが昼も夜もずっと抱いていましたが、しばらくしてお姉さんの腕の中で亡くなりました。色の白いかわいい男の子でした。その頃から澄子お姉さんの髪の毛が抜け始め、歯茎からも出血するようになりました。私の母もたびたび貧血で倒れ、体調の悪い日が続きました。また体中に吹き出物のような湿疹ができました。なかなか治らないので、遠くの病院に行き診てもらいましたが、原因は分かりませんでした。友達は気持ち悪がるし、とても恥ずかしく一年くらい悩みました。助けられて似島の野戦病院に収容された翠お姉さんは、しばらくして母の家に戻ってきましたが、長い療養生活を送りました。私の祖母も伯母も皆がんで亡くなりました。

5. 戦後の母 (5分17秒, 1,585文字)

00:37:06

これからは戦後について少しお話しします。戦争が終わって本当に良かった、と思ったことは、もう不安な日々を過ごさなくてもよくなったことだった。また一番うれしかったことは、学校で勉強をすることができるようになったことだったと母は話します。戦後、母は教師となり、小学校に勤めました。その当時、原爆症は移る。被爆者は長生きできないし、結婚すると障害のある子供が生まれるという根拠のないうわさがたち、多くの被爆者が結婚や就職ができないなどの差別を受けました。母の両親も心配しましたが、母は結婚することができ、私を25歳の時に出産しました。しかし産後は体調の悪い日が続き、体がだるく、起き上がることもつらく、実家に帰り2年ぐらい静養しました。体がふらふらとして力が入らず、貧血にも苦しみました。今思えば、放射線の影響に違いないと母は話します。そのような体験をされた被爆者も多く、原爆症の後障害の一つで、ぶらぶら病と呼ばれています。私の娘が東京出身の男性と結婚することになった時も、被爆者であることは話さないと強く言われました。被爆者への差別や偏見は戦後長く続き、原爆の被害者であるはずの被爆者を精神的にも苦しめ続けました。そのため、多くの被爆者は被爆したことを隠して生活していました。母も被爆体験を人前で語ることはありませんでした。

2010年、母が79歳の時に、アメリカのセントラル・ミズーリ州立大学で、アメリカの学生に被爆体験を話す機会がありました。日本からおばあさんが訪れて、被爆体験を聞いてもらえるのだろうか、ミズーリ州は原爆投下の命令を下したトルーマン大統領の出身地なので、どのような反応をされるのだろうか、と不安な気持ちでいっぱいでしたが、学生たちは母の講話を熱心に聞き、目に涙を浮かべ、遠くアメリカまで来てつらい体験を話していただきありが

とう。家に帰り、家族や周りの人に伝えます。もっと核兵器のことを勉強します。原爆が落とされて戦争が終わった、と歴史の授業では習ったけども、その時に原爆の恐ろしさや被爆者の悲しみや苦しみを想像することはできなかった。知らなかったの。ごめんなさい。許してください。と謝られる学生もいました。その時に、学生たちの間で共感の輪が広がり、平和への意識がつながることを感じました。そして、言葉には人の心を動かす力があるので、言葉の力を信じて、原爆の恐ろしさや悲惨さを若い人たちに語り伝えていかなければならない、と強く思いました。

講話中に母の絵本が画像で流れました。母は心の中でつぶやきました。文子ちゃん、とうとうあなたのことをアメリカの人たちに話しましたよ。その時に文子ちゃんの顔が笑ったように見えました。

また、建物疎開作業で亡くなった中学生たちの絵に、わずか12歳か13歳で虫けらのように亡くなっていった、あなたたちの無念の魂が、私をここまで連れてきたのですね、と呼びかけました。僕らのことを伝えてという夢での約束も、果たせたような気もしました。アメリカでの体験がきっかけとなり、母は83歳の時に被爆体験証言者となり、資料館で被爆体験を語り始めました。

原爆投下から78年がたちました。母は時々若い人たちに、あの日見たことを話しています。戦争中は御飯も十分に食べることはできませんでした。甘いお菓子やケーキもありませんでした。お腹を空かせながらも、お国のために頑張ると一生懸命に働いて亡くなっていった中学生たちの無念の思いを伝えたいからです。

おなかいっぱい御飯が食べたい、勉強やスポーツがしたい、友達と遊びたい、お母さんに会いたい、戦争さえなければ、原爆にさえあわなければ、きっと素晴らしい人生があったと思います。あの地獄のような夏の日を生き残った者の責務として、母は二度と再び原爆のような核兵器が使用されないように、核兵器廃絶を強く願い、今も語り続けています。

6. 今なお続く核兵器の脅威（1分14秒，401文字）

00:42:23

これから、今なお続く核兵器の脅威についてお話します。皆さん、この世界地図を御覧ください。現在世界では、9か国が合わせて約1万2,500発の核弾頭を保有しているといわれています。このような核兵器を持っているということは、使われる可能性があるということです。コンピュータの誤作動による意図せぬ核戦争の可能性や、最近では核テロの危険性も高まっています。ロシアのウクライナ侵攻による核戦争の危機も懸念されています。また核兵器の威力も、広島や長崎に落とされた原爆よりもはるかに大きな破壊力を持つものなので、もしも再び使用されたら、どのようなことになるのか、と想像するだけでも、とても恐ろしくなります。どれだけ核兵器が危険なものであるかを私たち一人一人が自分の問題として考え、地球上からなくすための努力をしていかなければならないと思います。核兵器は人間によって作られたのですから、必ず人間の力で廃絶できると信じています。

7. 広島の復興（3分19秒，794文字）

00:43:37

これからは広島の復興についてお話します。

原爆により75年間、草も木も生えないといわれた広島は、戦後国内外からの援助もあり、多くの人々の努力により復興しました。この写真は、建設中の資料館と平和大通りに木を植えている様子です。焼け野原となった広島に、全国から2年間で、約6,000本もの木が贈られました。78年たって、それらの樹木が大きく生い茂っています。

広島は緑豊かな平和都市としてよみがえり、世界に核兵器廃絶と平和への祈りを発信し続けています。一人一人の小さな平和の願いも、核兵器廃絶の声も、たくさん集まれば大きな力になることを信じて、広島の悲惨な体験や平和への思いを受け継ぎ、そして語り伝えていきたいと思います。たとえ戦争や被爆の体験がなくても、広島で起こった事実を知り、絶対に忘れないで記憶し語り続けることが、地球上から核兵器をなくし平和な世界を築くことにつながっていくと思います。

私から皆さんにお願いがあります。これからの時代を担うのは皆さんたち若い世代です。どうか皆さん、今日聞いたことや感じたこと、考えたことなどを心に刻み、家族や友達など周りのたくさんの人に伝えてください。今もウクライナでは、ロシアの軍事侵攻による戦争は続いています。人と人とが殺し合う愚かな戦争を、絶対に繰り返さないように、皆さんの次の世代の人々にも語り続けてください。平和は願っているだけでは訪れてくるものではありません。私たち一人一人が自ら考え、行動してつくり出していくものだと思います。

また、私は世界中の人々が広島を訪れ、平和記念公園や資料館を見学されることを強く願っています。資料館で原

爆犠牲者の遺品に向き合い、実際に自分の目で原爆被害の実態に触れることによって、核兵器がもたらした悲劇が伝わり、核兵器の恐怖や非人道性についてより深く考え、理解することができると思うからです。皆さんもぜひ広島を訪れてください。

8. 教皇ヨハネ・パウロ二世の平和アピール (59 秒, 251 文字)

00:46:56

これは資料館東館ロビーにあるローマ教皇の平和アピール碑です。最後に 1981 年 2 月、広島を訪れたローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が、平和記念公園から世界に向けて発した平和アピールを御紹介し、私の講話を終わりたいと思います。

戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命を奪います。戦争は死そのものです。過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。ヒロシマを考えることは、核戦争を拒否することです。ヒロシマを考えることは、平和に対しての責任を取ることです。

今日は長い間お話を聞いていただき、ありがとうございました。

○質疑応答

00:47:55

○外池 森河さん、どうもありがとうございました。

○森河 はい、ありがとうございました。

○外池 せっかくの貴重な機会なので、学生の皆さんも質疑応答で直接お聞きしたいようなことがあれば、遠慮なく聞いてみてください。どうでしょう。遠慮しないで聞いてください。なかなか手が挙がらない。楽音君は何か言いそうかなあ。一応、何年の名前だけ。

○佐々木 秋田大学 4 年の佐々木です。今日は貴重なお話ありがとうございました。

○森河 こちらこそありがとうございました。

○佐々木 大学では、マクルーハンさんのメディアメッセージを学んだのですが、そのメディアというのはさまざまなものを指しているということなので、私たちは教員志望がほとんどですが、その授業 1 時間においても、何かメッセージを絶対伝えているということを勉強したので、森河さんが今日お話を私たちにすることで、一番伝えたいこと、主張したいことは何なのかというのをまず一つお聞きしたいです。

○森河 今、もう 78 年もたったので、戦争の記憶は薄れていますよね。皆さん、特に秋田だったら、原爆のこととか余り御存じないのではないかなと思って、少しでも原爆のこと、被爆者の話をするによって、原爆のことについて関心を持ってもらいたいなあと、広島を訪れたい、資料館を訪れたいなあと、思ってもらいたいと思いながら話をしています。

○佐々木 はい、ありがとうございます。もう一つ、森河さんにとって、平和というのはどういうところが。

○森河 私は、小学生には、平和は明日があることだと伝えていきます。みんなが明日友達と何して遊ぼうかなあとか、友達とどこに行こうかなあ、家族とどこに出掛けようかなあとか、そういう何か私たちが当たり前のように考えている日常が、原爆や戦争に奪われますよね。だから明日、一人一人に明日があること、未来があることと思うのですが、分かりますか。かけがえのない日常が平和だと思います。

○佐々木 ありがとうございます。明日があることについて、そういう平和な社会を形成するために、私たちには何ができるのかと考えた時に、何か考えがあれば。

○森河 小学生の人だったら、周りの人、けんか、いじめをなくして、小さな平和を築き上げていくことも大変だと思いますけれども、皆さん教師になられるのだったら、ぜひ戦争の恐ろしさを絶対に伝えてほしいと思います。本当にもう戦争は嫌だ、怖いと嫌悪感を抱くぐらいに伝えてほしいのです。もし、また繰り返すようなことがあったら、もう本当に大変なので、戦争の恐ろしさをぜひ伝えてください。

○佐々木 はい、ありがとうございます。

○外池 その他どうですか。せっかくなので。3年生、4年生でもいいですよ。

○興野 秋田大学3年の興野と言います。本日は貴重なお話ありがとうございました。内容とは外れてしまうかもしれませんがのですけども、被爆体験伝承者の資格をとるのに3年の時間をかけてという話があったのですけども、3年の間で具体的に何を知るのか、何を学ぶのか、どこか訪問するのか、3年の間でどのようなことをするのかというのを知りたいと思いました。

○森河 私たち、今2年になったのです。私たちの時は、1年間大学の先生とか専門家に原爆被害の実態とか、その当時の戦争の歴史とか、その当時の様子とかを学びました。そして被爆体験、被爆証言者、被爆者の方のお話を、もう20人ぐらいの方から聞きました。その中から、自分がこの人のお話を伝えたいなと思う人の弟子になるのです。弟子みたいな形に。選ぶのです。その人から2年目は、月に1回その被爆者の方からいろんな体験、あの時に話していらっしやらない体験をいろいろお聞きして、そして文章に書かないと、1万字の原稿を書くのです。1年間で仕上げるのです。

それで3年目は、原稿がまた返されて、直したり、何度もありましたけれども、3年目は人前で話すための練習とか3回ぐらいしました。そういうことで3年で、今は被爆者の方が本当に、私の知っている被爆者もどんどん亡くなっているのです。だからもう2年間になっています、今は。

○男3 ありがとうございます。

○外池 その他はどうですか。

○珠井 お話ありがとうございました。先ほど。

○外池 名前。

○珠井 すいません。3年次の珠井宗瑠と言います。先ほどのお話の中で、原爆のお話について若い人に関心を持ってもらいたいというふうにされていたと思うのですけども。若い人が原爆について知っていくことと、もう一度このような戦争とか悲劇を繰り返さないことというのは、どういうふうにつながっていくのかということについて、何かお考えがあれば聞かせてほしいです。

○森河 原爆のことと。

○珠井 はい。原爆のことを知ることと、戦争とか悲劇を繰り返さないことがどうつながるかということなんです。

○森河 一人一人の意識じゃないですか。一人一人が戦争をしたくないとか、原爆は怖いとか、そういう意識がないと、世の中は変わっていかないですよ。だから、私は一人一人が皆そういう考えになれば、戦争は起こらないと思いますし、今ロシアとウクライナの戦争で、皆さんリアルに感じているのではないかと思うのですけども、核戦争がもしも起こったらどうなりますか。それは原爆の恐ろしさを知っていなかったら分からないですよ。本当に原爆の恐ろしさを知ったら、核兵器は使えないとは思っているのです。だから被爆者の体験が抑止力になっているのではないかと思っているので、やはり皆に広島で起こったこと、もちろん長崎も、ですけども、そういう被爆の体験、

もう周りに多分いらっしゃらないでしょう、知っている方。

先日、小学生の子供が泣きながら聞いてくれたのです。小学校5,6年生の子供が。怖かったと聞いたら、私、ひいおばあちゃんのことを思い出したと私の体験を聞いて伝えてくれたのです。多分その子は、ひいおばあちゃんから戦争体験を聞いていたのです。そのことを思い出したのです。そういうふうに、もっと身近に感じてほしいのです。身近なこととして。原爆は遠い昔の出来事、戦争は遠い昔の出来事ではなくて、身近なこととして感じてもらいたいと思います。

○珠井　ありがとうございます。

○外池　加納先生どうぞ。

○可能　いいですか。すいません、教員をしています加納と申します。今日はありがとうございます。小っちゃい話から大きな話も聞きたいことがあるのですけれども、まず一つ、この絵が象徴的だなと思ったのですけれども。お母さまが描かれたという話だったのですが、これは小っちゃい話で、くだらない話かもしれないのですけれども、頭がなぜ一か所に揃っているのでしょうか。並べるのだったら、横にばあっと全部並べても。

○森河　花壇なのです、丸い、丸い花壇。

○加納　丸い花壇だから。頭が揃っている？丸い花壇だったからというぐらいですか。

○森河　母も78年たっていますでしょう。14歳だった時見た、母はこういうふうに見えたのではないですか、その時。絵が下手だから、おかしいですね。私も思うのですけれども。だけど、母がその時にそういうふうに思っていたのではないですか。それをずっと。

○加納　頭というのか、何か宗教的な意味なのかなあと。

○森河　そういうのはなくて。でもこういうふうに並べられていたのではないかと思うのです。母がそういうふうに描いたということは。

○加納　分かりました。もう二つぐらい聞きたいことがあるのですけれども。僕、ここに着任して7年たつのですけれども、今までも長崎、広島の方からお話を聞いてきたのですけれども。興味深いと言えばお母さまの視点からというのか、お母さまの話が中心だったところが、象徴的だなあと思ったのですけれども。お母さまが語られる語り口というのは、お話しされる時に誇張してらっしゃるといって語弊があるのですけれども、どうですか。伝わりやすいように、それは伝える側として、少し改変したりとか、分かるようにお伝えしているのか、どちらかなあと。

○森河　それはもう体験している本人だから、話すことが全部被爆体験ですよ。私は本当に母の心情を考えながら、想像しながらですけれども、語りが余りうまくできない。うまくいって語弊がありますけれども、どこまで伝わっているのかなあ、皆さんに、と思いながら日々試行錯誤の毎日です。

○加納　その語り口みたいなのは、やはり試行錯誤、分かりやすいようにと思うのですけれども、そこはいろいろ考えられて。

○森河　間を取ったり、感情的な部分はもっと言えたらいいんですけれども。朗読の方とか、とても上手な方がいらっしやいますけれども、私はそういうのは本当に大変です。

○加納　家族のことを話すのと、体験というか伝承者みたいな形でお聞きするというのは、やはり違いがあるとお考えですか。

○森河 家族として聞く場合ですか，母に。それは何でも話せます。前は私も1期生の時は，他の方を取ったこともあるのですが，やはり被爆者の方は，語りたくない部分は閉ざします，口を。それ以上踏み込めないです。でも，母であつたら，何でも聞けます。だから，そういう点は母のほうが聞きやすいです。

○加納 ありがとうございました。

○外池 どうもありがとうございました。

○森河 どうもありがとうございました。

資料 6 長崎市「交流伝承者」堀田雄二氏講和文字起こし (40 分 17 秒, 9,074 文字, 質疑応答を除いた時間と文字数)**○自己紹介, イン트로ダクション (2 分 10 秒, 657 文字)**

○堀田 皆さん, こんにちは。私は長崎平和推進協会からまいりました, 丸田和男さんの被爆体験を語り継ぐことになった堀田雄二と申します。どうぞよろしくお願いいたします。重たい話が二つ続いて, 重たい気持ちになられているだろうなあとということを思いながらも, お話も先ほどの方とちょっとだぶってしまうところも多分あると思うのです, 原爆の被害とか。そういったところも鑑みながら, お話を聞いていただければというふうに思っています。

私は秋田に来るのは生まれて初めて。楽しみでまいったのですが, ただ先日の豪雨災害からようやく 10 日たったぐらいですか。もう皆さんたちの中で, 被災されていらっしゃる方がおられるのではなかろうかと思って, 気が気じゃなかったです。外池先生のほうにも連絡させてもらってから, 学生さんたち大丈夫ですかと話をさせてもらったところだったのですけれども。本当に衷心からお見舞い申し上げます。

私が住んでおります佐賀県の唐津のほうでも, 7 月 10 日に豪雨災害がありまして, 私がウォーキングで歩いているほんのすぐ近くのところに土石流が発生して, 3 人の方が亡くなりました。今日は何かの縁で, 何かの縁で今日こういうふうに会して, 皆さんたちと 78 年前の出来事を通して, 平和への思いを深めていきたいというふうに思っているのです。

今日私がお話しするのは, 長崎で実際に原爆の被害にあわれた丸田和男さんの体験です。私, よく中学生にお話しをすることが多いもので, 皆さん方には少しもの足りなさを感じられるかもしれませんが, その辺はすいません, 御了承ください。

1. 丸田和夫さんの紹介 (1 分 23 秒, 342 文字)

01:02:36

小学校 6 年生の頃の丸田和男さん, 今こちらに, ここにいらっしゃいます。友達からは, 和ちゃん, 和ちゃんと呼ばれて, いつも, いつも楽しく遊んでいらっしゃったというようなことをお聞きしています。

その丸田さんは現在 91 歳, 大変優しいまなざしで, いつも私たちのことを見守ってくださっています。御趣味はというと, 山登り, それから川柳を作られること。今日も私の話の途中, 途中で, 川柳を御紹介したいというふうに思っているのです。

ここで一つだけ皆さんたちにお願ひがあります。こちらのほうに写真とか資料を映しながら話をしていこうと思うのですが, どうしても悲惨な写真が含まれています。ちょっともう見るのがたまらんなというような感じになられましたら, どうぞすぐに視聴をひかえていただければというふうに思っています。

2. 原子爆弾について (7 分 07 秒, 1,782 文字)

01:03:59

それじゃあ, 丸田和男さんの被爆体験をお話するその前に, 原子爆弾の話をさせてください。

皆さん, 突然ですが, 原子爆弾と普通の爆弾, どこがどう違うと思いますか。先ほど話聞かれましたから, 何となし分かりますかね。

もうかなり前の話です。四十数年前の話, 長崎の市長をなさっていた本島等さんという方がこう例えられたのです。原子爆弾には 3 本の毒の牙がある。1 本目と 2 本目の毒の牙は, 普通の爆弾にもあるけれども, 3 本目の毒の牙は原子爆弾にしかない。この 3 本の毒の牙のことについて, 話を進めてまいりたいと思います。

1 本目の毒の牙, これが原子爆弾の熱線です。

78 年前の 8 月 9 日, 長崎上空に B 29, ボックスカーという巨大な爆撃機が飛んでまいりました。積んでいるのは, ファットマンと名付けられた原子爆弾。この原子爆弾, 地上から 500 メーターの高さで爆発するように, これ最初からセットしてあったのです。この 500 メーターという高さが人や建物に最大の被害を与えるということを, アメリカ軍は最初から知っていたのです。11 時 2 分, それは爆発しました。

爆発の瞬間, そこには数千万度の火の玉が現れ, 1 秒後, その直径は 280 メーターまで達しました。そしてその真下, ここを爆心地ともいいます。この爆心地の地面の温度が 3,000 度から 4,000 度になったといわれています。これは先ほども言われましたよね。でも, 3,000 度とか 4,000 度と言われても, 想像することもできないのですけれども。よく例えられるのが鉄です。鉄がドロッと溶ける温度, これが 1,538 度だといわれています。

熱線は爆心地から離れれば離れるほど、その温度は下がります。しかし、熱線を直接浴びた人に大やけどを負わせ、その後起こった光熱火災は長崎の町全体を包みしました。

この光熱火災は全てを焼き尽くしました。こちらを御覧ください。爆心地から 400 メーターのところにあったガラス瓶です。もう溶けてしまってひっついてしまっています。

こちらは爆心地から 700 メーターのところで亡くなった少年の遺体です。体内の水分はもう完全に蒸発してしまい、まるで生きた最後の姿を形どったかのような炭のかたまりとなり、手に取るとボロッと崩れてしまったのだそうです。これが 1 本目の毒の牙、熱線、その被害です。この後起こった光熱火災によって、どれだけたくさんの人が生きながらにして焼かれ、亡くなっていったことでしょうか。

2 本目、2 本目の毒の牙、爆発によって生じる猛烈な風、爆風です。これは皆さんたちにどういうふうに説明しようかなあとちょっと悩んだのですが、今地球温暖化のせいですか、台風の巨大化が非常に心配されています。もし、皆さん、風速 60 メーターから 70 メーターの台風接近、こんな速報が流されたらどうされますか。これは大変だと、超巨大台風が近づいてきている、もうこれは慌てふためくと思うのです。原子爆弾の爆風は一体どれぐらいかというと、風速 440 メーターです。

爆心地から半径 2 キロ以内の木造の建物は、そのほとんどが倒壊し、吹き飛ばされたのです。こんな感じで。

そして、鉄骨もねじ曲げてしまいました。1 本目の毒の牙、これが熱線、2 本目が爆風、そして 3 本目、原子爆弾にしかない毒の牙です。

それが放射線です。放射線は目に見えません。色も付いていなければ、匂い也没有。ただ不思議な特徴があるのです、これが。ものを通り抜けるのです。我々の体も通り抜けて行きます。ただ通り抜けるだけだったらいいのですけれども、通り抜ける時に、我々の体のもとになっている細胞、この細胞を壊して出て行く。壊されてしまった細胞は二度と元には戻りません。そしてここから、さまざまな病気を引き起こすのです。

突然ですけれども、皆さん、こちらを御覧ください。動きます。何の建物か分かりますか。長崎原爆病院なのです。じゃあもう一つ質問。何でこんなに大きくて立派な病院が必要なのですか。78 年たった今も、この原子爆弾の放射線による病気で苦しんでいる人がいっぱいいるからです。この後御紹介する丸田和男さんも、今までに三つものがんと戦ってこられました。そして、こうおっしゃっています。生きている限り、病気に対する不安と恐怖は消えないと。もう皆さんたち、気付かれたと思います。原子爆弾の被害は、今も、この瞬間も続いています。

3 本の毒の牙が、被爆者の方々の心と体に深く食い込んだままなのです。

3. 丸田和夫さんの被爆体験（19 分 00 秒, 4,230 文字）

01:11:06

それでは、丸田和男さんの被爆体験のお話をしていきたいというふうに思います。1945 年、昭和 20 年です。丸田和男さんは、県立瓊浦中学校の 1 年生、13 歳でした。

さて、その日、78 年前の 8 月 9 日は、もういつもと全く変わらない、普通の朝を迎えたのだそうです。学校はというと、期末テストの最終日。夏休みに期末テスト。こんなふうに思われた方もおられるかもしれない。聞くところによると、当時の中学生、夏休みがなかったのだそうです。ちょっとかわいそうですね。今の時期だったら、小中学生なんかは夏休みを迎えていると思うのですけれども、当時なかったということです。ただ、8 月 9 日のテストは、1 科目だけ受けたら、あとはもう下校してもいい、そんな日で、そのテストももう 10 時ぐらいには終わって、10 時半には友達

の田島君と、そろそろ帰ろうか、そんなことを言っている日だったのです。

これから先の話なのですけれども、丸田さんの気持ちにより近づくために、丸田さんは何々と、こういうふうに言うのではなくて、僕は、私は、というふうに、丸田さんになり代わってお話をしていきたいというふうに思います。

最初に、こちらの地図を御覧ください。私たちが通っていた瓊浦中学校はここに 있습니다。そして、私の家は、爆心地から南南東に 1.3 キロ離れた、ここにあったのです。

時刻は 10 時 30 分、僕と田島君は、学校の校門を出ました。瓊浦中学校は今、長崎西高校というところへ変わっています。校門を出ると、遅刻坂とみんなが呼んでいた坂道を下っていきます。ここは朝ぎりぎりでも来ちゃうと、絶対にここで遅刻しちゃうというような坂なのですが、ここをずっと下りていくと、左手のほうには青々と葉を茂らせたクスノキが見えます。ここを下りきって、柳川橋という橋を渡り、そして森町の踏切を渡りました。自分の家がかった銭座町の山手のほうにずっと上がっていくのです。

これから先の道は、78 年前の名残をよく残した、狭くて細い階段の路地です。長崎らしい風景なのですね、これ。

ここをどんどん上がって行って、突き当りを右、そこに私の家があったのです。この正面のクリーム色の家の辺りです。ここで私は母と2人暮らしをしていました。

今の風景でいうこうなります。私の家があったのは、ここだったのです。家にたどり着いた時刻は10時50分頃、この時刻、先ほどお話ししたB 29 ボックスカー、長崎上空にちょうど差し掛かった時刻だったのです。お母さん、ただいま。返事がありません。まあ、どこか出掛けているのかなあ。特に気にすることもなく、家の中に入りました。疲れた。暑い。8月9日ですもんね。僕は家の中に入ったら、上半身裸になって、短パン一つになって汗を拭いていたのです。すると、上空はるか高いところから、飛行機の音がするのです。空襲。僕はすぐ家の中庭に出て、空を見上げました。その日の長崎の空は、3分の2ぐらい雲がかかっている、3分の1に青空が見えるという、そういう空模様だったのです。幾ら目を凝らして見ても、その飛行機の姿は見えません。偵察かなあ。通り過ぎるだけだったらよかばってんが。そんなことを思いながら、また家の中に戻って汗を拭いていたのです。すると、先ほどまで上空はるか高いところから聞こえていたその飛行機の音が、突然ものすごい爆音に変わったのです。

その次の瞬間。

ピカーッ。青白い閃光が長崎の町全体を包みました。そしてその2、3秒後、ものすごい爆風が家もろとも私を吹き飛ばしたのです。

この時の様子を皆さん方にどう伝えたらいいのか、今もずっと悩んでいます。表現できる言葉が見当たらないです。あえて申し上げるならば、真っ暗なトンネルの中、例えようもない強い砂嵐で吹き飛ばされた感じ、そう表現するので精いっぱいです。ただ、人間の感覚というものは不思議なものがあるのです。生と死のはざまに立たされた人間は、過去の記憶が、よく走馬灯のようにという表現がなされますが、過去の記憶が走馬灯のように鮮明に思い出されてくる、こんなことがよくいわれるのです。多分私も似たような感覚だったと思うのです。自分の体が吹き飛ばされ、そして家が崩れてくる様子、時間にしたら1秒もありません。その様子をはっきりと覚えているのです。そして、こう思いました。俺はここで死んでいくのだな。まだ13歳なのにと。

気が付いた時、私は完全に倒壊し、ぺちゃんこになってしまった家の下敷きとなり、全く身動きを取ることができませんでした。しばらくすると、なんか首から背中にかけて、生ぬるい何かを感じるのです。俺の体から血が吹き出ている。身動きが取れない中、大量に出血しているのです。ふっと耳をすますと、私の家の前の道を、山手のほうに逃げていく人々の気配。もう私は悲鳴のように叫び続けました。助けて。助けて。誰も助けに来てくれる人はいません。それはそうです。みんなもう自分のことで精いっぱいだったのです。そのうち、遠くのほうから、火事だ、火事だぞー。男性の声。いかん、このままじゃ焼け死んでしまう。焦りました。とにかく力を振り絞りました。もう振り絞って、振り絞って、どうにかこの家の下敷きを抜け出すことができたのです。こちらを御覧ください。私の家はここにあったのです。

そして、こちらが私の家の見取り図です。私はここで被爆をしました。

実際に同じ場所に立ってみました。今でもあの時の光景がありありとまぶたに浮かんでまいります。

この赤い矢印は爆風の方向です。私の家には、こことここに窓ガラスが入っていて、粉々に割れたガラス片は、容赦なく私を襲いました。背中全面に約50か所、ガラスが突き刺さっていました。このガラス傷はこの後何年も何十年も私を苦しめることとなります。

命からがら家の下敷きを脱した私は、意識がもうろうとする中を、段々畑を乗り越えて、のどの乾きに耐えながら、砲台跡の空き地に向かうことになるのです。砲台跡というのは、特に避難所とかに指定されていた場所ではありません。昔、明治の頃までは、実際に大砲が備え付けてあったのですけれども、太平洋戦争の頃にはもうその大砲もなくなり、ただの広場、子供たちの遊び場になっていたところだったのです。ただ、そこに向かう途中で、何度も意識が遠のいてしまったのです。もう駄目だ。道端に座り込んでしまった私に、後ろのほうから、ほら丸田君、頑張ってと近所のおばさんが声を掛けてくださったのです。あの時におばさんが声を掛けてくださらなかったら、私はどうなっていたか分かりません。はっと頭を上げると、おばさんの右肩のほうに、これまたひどいけがをなされた女の方、血だらけでした。私はおばさんの左肩を借り、3人で励まし合いながら砲台跡を目指しました。ようやくたどり着いた砲台跡、この時の光景を私は生涯忘れないと思います。

全身真っ黒く焼け焦げた人、真っ赤に焼けた人、その叫び声、うめき声、その人にとりすがって賢明に励まそうとする家族の声、泣き声。周りにはたくさんもの既に息絶えた人々。人の姿を失った人々の群れ。

もし、この世に地獄というものがあるのだったら、それはここだと思いました。もはや私に動く力はありません。まるで死んだかのように、身を横たえることしかできませんでした。しばらくすると、雨が降ってきたのです。大粒

の雨です。放射能を大量に含んだいわゆる黒い雨でした。上半身裸で短パン一つ、死んだように横たわっている私になすすばはありません。雨に、黒い雨に打たれるがままでした。

足元のほうで、近所の方々の会話が聞こえます。その話し声の一つがずっと耳に入ってきたのです。丸田さんの奥さん、駄目やったばい。私はその時初めて、母が亡くなったことを知ったのです。即死だったそうです。信じてもらえないかもしれませんが、その時涙はおろか、悲しみの感情すら湧いてきませんでした。お母さん、死んでしまった。そう心に浮かぶだけだったのです。私には母の死を悲しむ気力も体力も残されてなかったのです。

その日の夜、8時を回っていたと思います。日はとっぷりと暮れていました。親戚のおじさん、母の弟さんです。親戚のおじさんが、私たちを探しに来てくださったのです。変わり果てた姿になっている私をようやく見つけて、おじさんは、和ちゃん、大丈夫やったか。お母さんは。お母さん、死んだ。そう答えることしかできませんでした。

次の日、8月10日の朝、私は新聞紙にくるまった母の遺骨を手にとることとなります。おじさんが見つめてきてくださったのです。たった1日前です。わずか1日前の朝、学校に向かう時に交わした、お母さん、いってきます。いってらっしゃい。この会話が最後になるなんて。あのお母さんが今、自分の手で骨になっているなんて。13歳の私は、ただただ呆然と立ち尽くすことしかできませんでした。

実はこの間も、私の体はどんどん衰弱していったのです。8月9日の夜中からだったと思います。下痢が止まらなかったのです。下痢といっても普通の下痢ではありません。血の下痢でした。これが原爆症の初期症状だということは、後になって分かったことです。首から背中にかけての大量の出血、止まらない血の下痢、吹き飛ばされた時に負った体全身の痛み、そして後から出てきた40度を超える高熱。もう私の体はぼろぼろでした。しかし、どうにか命をつなぎとめることができたのです。奇跡だと思っています。でも皆さん、私は一瞬にして、一瞬にして何もかも全てを失いました。お母さん、友達も、家も、大切にしていたものも、何もかも全てです。ただ一つだけ、焼け残っていたもの、それがこれでした。

マリア観音さまです。このマリア観音さまを見るたびに、私は母のことを思い出します。こんな私の唯一の心の支えは、友達との再会、ただそれだったのですが、それも悲しすぎる現実を突きつけられることとなります。

瓊浦中学校1年生299名、その3分の1以上です、114人が原子爆弾の犠牲となっていました。その多くが、どこでどのような最後を迎えたのかも分かりません。ある友達のお母さんは、懸命に我が子を探されるのです。でも、見つからないのです。遺骨もなく、お墓の中には、本人が使っていたであろう水筒しか入っていない、そういう友達もいました。あれから78年です。私は友達のこと、もちろん母のこと、深く、深く心に刻みながら、今こうして生きております。

4. 黒こげのご遺体写真について（3分53秒、956文字）

01:30:06

実は皆さんたちにお伝えしたいもう一つ、お伝えしたいことが実はあるのです。7年前の話なのですが、2016年6月14日、私は新聞のある記事に目がくぎづけになったのです。記事の内容はこうです。長崎市内で開かれていた原爆の写真展、ある写真の前で、山口さんとおっしゃる御婦人の足がびたっと止まったのです。その写真というのは、原爆の悲惨さ、原爆の理不尽さ、こういったものを最もよく表したものの一枚、こういうふうにいわれていたものだったのですが、大きく拡大され、大きくなった写真を、山口さんはまじまじと見られたことがなかったのです。じっと見られて山口さん、ピンとこられました。この子、私のお兄ちゃん。それからの行動は早かったそうです。すぐに専門家の方に鑑定を依頼され、そして出た結果が、山口さんのお兄さんでほぼ間違いないでしょうというものだったのです。

その写真というのがこちらです。皆さんたちにはもうあの熱線のところで既に見ていただいていた、あの写真だったのです。山口さんのお兄さん、谷崎昭治さんだったのです。山口さんはもうすぐにこの写真を焼き増しされ、家族が眠るお墓にそなえられました。そして、101歳で亡くなったお母さんに、お母さん、やっとお兄ちゃん、連れてきたよと報告されたのだそうです。お墓の中には、お兄ちゃんが使っていたであろう水筒しか入っていませんでしたから。谷崎昭治さん、いや、谷崎昭治君は、瓊浦中学校の1年生、私の友達だったのです。

どこでどのように亡くなったかも分からない多くの友達が、七十数年の時を経て、僕たちはこうやって生きたんだよ、僕たちはこうやって死んでしまったのだということを、この一枚の写真の中から、まるで叫んでいるかのようにした。皆さん、1945年8月9日の朝、いってきますと言って学校に向かった多くの子供たちが、78年たった今もまだ帰ってきていないのです。

皆さんたちは今、いかがでしょう、自分が生きているとか、生きた証とか、こういったものを深く考えられる機会はありませんか。多分、多くの方は、自分の誕生日に、人生の節目を迎えたかな、こんなふうに感じられることでしょう。しかし私は、自分がこの世に生きている、自分がこの世に生かされている、こう実感するのは、自分の誕生日ではありません。

8月9日、まさにこの日なのです。

5. 皆さん方にお伝えしたいこと (6分34秒, 1,107文字)

01:33:59

私、堀田雄二がお伝えする丸田和男さんの被爆体験はここまでです。私が丸田さんからいろんなお話をお伺いして、そして皆さん方にお伝えしたいこと、これは実はとてもシンプルなことなのです。それは何かと申しますと、たとえどんな理由があろうとも、たとえ理由があろうとも戦争は絶対にしてはならないということ。そしてもう一つ、核兵器の廃絶です。

それではこちらを御覧ください。

皆さん、こんにち。私はただいま堀田さんが話されました長崎の原爆体験者、丸田和男本人です。最近、原爆を体験した被爆者がいなくなる時代が迫っているといわれ、被爆体験の継承、語り継ぐ、被爆体験の継承ということが差し迫った問題となっています。ということで、近年長崎では、被爆二世や若い人を対象に家族交流推進事業の名のもとに、長崎原爆を語り継ぐ事業が進められています。堀田さんは率先してこの事業に参加され、私の被爆体験を詳しく、それも若い人たちに分かりやすく伝えることに熱心に取り組んでおられ、私は全く頭の下がる思いでいっぱいです。何もしなければ歴史の尊い教訓は風化して忘れ去られていきます。皆さん方には、体験講話をただ聞いてもらうだけでなく、社会全体で長崎の原爆について幅広く、継続的に、そして永続的に語り伝えていっていただきたいと思っています。それはやがて大きな輪となって核兵器をなくすこと、そして戦争のない平和な世界の実現に一步でも近づくことになると信じています。御清聴ありがとうございました。

最後に皆さん方に見ていただきたいものを一つ持ってまいりました。それは星です。この星には、一つ一つ名前があります。名前がありました。そしてこの星を愛する人が周りにたくさんいました。この星もまた、周りの人たちを愛しました。この星には明るい未来があったのですが、一瞬にしてそれは踏みにじられてしまいました。1945年8月6日広島、8月9日長崎から天に上って行った21万4,000の星たちです。21万4,000の命です。皆さん、よかったら21万4,000という数字を見ないでください。この星一つ一つに家族があり、この星一つ一つに友達、友人、恋人がいて、そしてたくさんの未来がその一つ一つにあったということを、よかったら感じ取りながら見ていただきたいというふうに思っています。

21万4,000の星です。どんどん引っ張っていいです。ありがとう。21万4,000の星です。これだけの人たちが亡くなっていったのです。ありがとうございました。丸田さんが、丸田さんが託された平和のバトンを、皆さん方と一緒に引き継いでまいりましょう。今日は最後まで私の話を聞いていただいて、本当にありがとうございました。感謝申し上げます。ありがとうございました。

○質疑応答

○外池 堀田さん、どうもありがとうございました。またせっかくの機会ですので、質問なりあればお願いします。

○野中 3年の野中といいます。本日はありがとうございました。何点かお伺いしたいことがあるのですけれども。堀田さんが伝承とか交流というか、今丸田さんのお話をさせていただいたのですけれども、そもそも伝えようと思い始めた理由についてお伺いしたいのですけれども。何かきっかけとかあってでしょうか。

○堀田 私がこういうふうな活動をやっていると思ったのは、実は二つありまして。まず一番の大きな理由は母親です。母親は戦争が終わる時に15歳でした。朝鮮半島から引き揚げてきました、命からがら。皆さん知らないかもしれませんが、対馬海峡、そこには実はアメリカ軍がたくさんの機雷、爆弾を仕掛けていたのです。朝鮮半島からこちらに帰ってくる時に、12隻の船で帰ってきたのですけれども、日本にたどり着いた時に、その12隻が3隻になっていました。9隻は爆発、沈没してしまったのです。その3隻に母は乗っていました。それで、もう私が中学生、あるいは高校生の頃、ずっとですけれども、とにかく戦争の話、原爆の話はよくしてくれました。横着な堀田雄二は、中

学生の頃、その話もう何回聞いたや。こうなって、こうなって、こうなって、こうなるじゃろう。そんな横着なことを言っておりました。でも、だんだんと、自分中学校の教員、社会科の教員をしたのですけれども、自分が今度生徒に戦争のことについて話をする時に、自分の心の土台にしっかりと母親のその思いというものが根付いていた、そのことをあらためて気づかせられました。一番の理由は母親です。

もう一つ、長崎出身に立花さん、評論家の方がいらっしゃるのです。その方がある講演会の中で、皆さん、近い将来、昨日の夜、最後の被爆者の方が亡くなりました、というニュースが必ず皆さんたちは突きつけられることになる。最後の被爆者が昨夜亡くなりました、この言葉が私にとってみたらものすごく大きくて、全世界に向けてこの被爆とか核兵器のことについて、もうみんなが言うのは当然いいのです、全世界の誰が言っても構わないのですが、説得力を持って、一番強く一生懸命言うことができるのは我々日本人じゃなかろうか。日本人が言わずして、一体誰が言うのか、という思いにかられたのです。この二つが大きな原動力として、今この活動を一生懸命させてもらっております。以上です。

○野中 ありがとうございます。私の祖母も満州引揚者のため戦争についてよく聞いていました。2点目なのですが、堀田さんにとって具体的に平和ってどのようなものですか。

○堀田 先ほどおっしゃった、明日があることとおっしゃったですね。いい言葉だなと思いました。とにかく、明日がないのです。何気ない我々の明日がないというのが、いかに不幸なのかということを思っています。原爆の話と同時に、私今特攻隊のことについて研究を自分なりに進めているのですけれども、特攻隊員たちは、何月何日の何時に出撃してから死んでいくということがもう自分で分かっている。原爆は落とされたことなんか分からないまま亡くなっていきます。特攻隊員たちは分かっているのです。そういった明日をも知れぬということ、これはもうやっぱり明るい明日というものが、皆さん方に絶対に来てもらいたい。単純で薄いなあと思われるかもしれませんが、平和というのはとにかく明日が来てもらうということ。私は本当にあの言葉は素晴らしい言葉だと思いました。ありがとうございました。以上です。

○外池 はい、その他はいかがですか。武石さん、せっかく院生で参加してくれていてどうでしたか。

○武石 秋田大学教職大学院の武石と申します。本日は貴重なお話ありがとうございました。私、すいません、これまで原爆に関する講話の体験とか、原爆ドームに出ていることも、今まであまり勉強してこなかったのですが、今回すごく新しい視点で戦争を考えることができて、とても勉強になりました。感想みたいになってしまって申し訳ないのですが、当時生きていた方々が、原爆が落ちた瞬間に何されたのかが分かっていないし、その後の後遺症も分からない、そういった状況はとても恐ろしいことだなというふうに感じました。世の中のニュースいろいろなことが起こっているところですが、心にもアンテナを張っていかないといけないというふうに感じました。ありがとうございました。

○外池 はい、そのほか、どうです。2年生どう。2年生誰かいない。

○永田 2年の永田です。内容とはちょっと違った質問になっちゃうのですが、単純に興味で、最後のほう、すごい星のことをやられて、すごい印象的だったのですが、1枚に何万人の星がなってるのかなあというのを、普通に純粋に気になって。

○堀田 1枚に2,000の星が印字されています。

○永田 これって星の数っていうのは、それは長崎のことを伝えられる方、皆これを最後にやるのか、それともアレンジというか、伝えやすいように工夫された結果、こういうのをやっているのかなと、どうでしょうか。

○堀田 先ほど、最後のところで一生懸命言っていたのですけれども、太平洋戦争で亡くなった方が310万人であるとか、いろんな数字というものが非常に軽いです。はっきり申し上げて数字というものは、どうしても命が宿らない。

その数字を少しでも構いません、ほんのちょっとでもいいから、あっと思っていただければ、もうそれで十分だというふうに思いながらこれを作っていました。ですから、これはいろんなところで使わせてもらっている部分は実はあるもので、これが中学生や小学生や高校生でもいいのですけれども、21万4,000ってこんなという、もうそれだけでまずは結構です。そしてこの小さい星一個一個に先ほど申し上げたような全ての人生があるのだということに、ほんのちょっと入り口に入っていただくだけで構わない。そうしないと、もう21万4,000、これで終わってしまうのは嫌でたまらなかったものですから、これは最後のあがきです。ですから、こんなことをしている変な人はいません。私ぐらいかどうかは知りませんが、こんな感じでやっています。平和の礎、沖縄の平和の礎にちょっとアレンジをいただいたものでもあるのですけれども。以上です。

○永田 このくらいで終わるのかと思ったらすごく続いたので、やっぱり21万4,000の重みをすごく感じたので、こういうものをぜひやってほしいです。

○堀田 狙いどおりです。

○外池 はい、その他はどうですか。楽音さん最後にいきましょう。

○佐々木 本日はありがとうございました。先ほど、平和とは明日が来るという、先ほどの平和とは、ということなのですけれども、そこについて具体的に聞きたいと思ったのですけれども。明日が来るということ、イコール生きるということにつながるのかなと自分は解釈したのですけれども。それについてお願いします。

○堀田 もうつながらない限り、命はもう駄目だと思っております。どこかでとにかく強引にというか、とにかく命が途切れてしまうというところ。先ほど私、12隻のうちの3隻に母親が乗っていてという話をさせてもらったのですけれども、生徒たちに話をする時に、もし残りの9隻のほうに母親が乗っていたとしたら、私は今ここにいないんだよねと、ここにおらんのよ、俺は、という話と、皆さんたちが今そこにいるのは、皆さんたちのじいちゃん、ばあちゃん、いや、ひいじいちゃん、ひいばあちゃんたちが、あの太平洋戦争を生き抜かれたから、いろんな方法で生き抜かれた。あの当時、78年前に、私は戦争に関係ございません、なんていう人は1人もいなかったわけですから。大なり小なりあの戦争に皆さん関わられてこられて、そして生き抜いてこられたから今皆さんたちはここにいるんだということ、そこを中学生たちには最後よく話をさせてもらって、締めくくりにさせてもらっているのです。とにかく命はつながらないと全て、これが全てなのです。ですから、途切れさせてはならないと思いながらやっていました。

○佐々木 ありがとうございます。もう二つ質問があるのですが。その平和形成のために私たち学生ができることについてお願いします。

○堀田 もちろん私たち、戦争を体験することはできないわけなのです。絶対に体験はできません。できない代わりに、代わりというのであれば、圧倒的な想像力、もうこれしかないと思っています。圧倒的に想像しまくるのです。思いまくる。相手のこと、あるいは戦争の頃のこと、単純なようなのですけれども、とにかく想像力が我々に残された最後の手段じゃなかろうかというふうに思います。ですから被爆、ものすごく、とんでもない地獄の状況の中でも、その当時の人たちは何が起こったかも分からない、でもそこを我々はありがたいことに想像できるのです。とにかく想像する、これしか我々に残されている手段はないと思っています。

○佐々木 最後の質問で、本筋から離れてしまうかもしれないのですけれども、堀田さんのお話はすごく聞きやすく引き込まれる、抑揚もあったり、視覚的効果もあったりして聞きやすかったのですけれども。それは先ほど教員をやっていたというお話があったのですけれども。教員をやっている、そこまでうまい方は余りいらっしゃらないかなと思ったのですけれども。何か他に、例えば落語をやっていたとか、何かあれば、なぜそんなにお話がうまいのか。

○堀田 特に何もやっていなかったのだけれども、皆さんたちが将来教壇に立たれて、あるいは生徒さんたちの前で話をされるような形に将来なれると思うのですけれども。私も一生懸命話をしていました。その一瞬、

一瞬が全部練習であることは間違いなく、しゃべりの練習であることは間違いなかったもので、子供たちにいかに聞いてもらうかというのは必死でした。手を変え品を変え、かなり悪い中学校とかにも転々で行ったのですけれども、こいつらにどうやってこっちに振り向かせるか、なんていうのはもう必死でした。そうしないともう出て行きますから、体育館から。そんなふうなところで、どうにかやろうとしていたことの連続だったのかなという感じです。ですから、特別何かをやったということではないです。

○佐々木 分かりました。私も必死に聞いてもらえるように頑張ります。ありがとうございます。

○外池 ありがとうございます。じゃあ、あらためて堀田さん、どうもありがとうございました。今年もお二人の話を聞いてもらえる機会が設けられて、本当に良かったと心から思いました。皆さんたちも、個々にいろいろ思った人たちがたくさんいると思いますし、社教研のゼミのウェブクラスのほうに、感想のフォーマットを添付で上げておきましたので、1週間後ぐらいまでに、それぞれ広島と長崎で思ったこと、考えたこと、いろんなことを書いてくれればなあというふうに思っていますので、よろしくお願いします。今日はどうも御苦労さまでした。お疲れさまでした。

1	広島市「被爆体験伝承者」講話	今回は貴重なお話をありがとうございます。お母さんの思いを引き継いぐと言う事で、娘さんしか出せないような雰囲気と熱量で、心に訴えかけてくるような講話はとても印象に残っています。また、「みなさん、想像してみてください。」や「自分の心として考えてみてください。」などの投げかけは、決してこのことが他人事ではないのだなということを再確認できる機会となるきっかけを作ってくれたと感じています。最後の方におっしゃって、「言葉には力がある。」というお話を聞いてくださるととても説得力があり、私自身も、「言葉」というものを大切に生活しなければいけないと感じました。 平和をこれから世界でほんとうの意味で実現することができると、若い世代の一員として改めて考えるのではないかと感じました。
2	長崎市「家族証言者」講話	今回は貴重なお話をありがとうございます。写真と声だけでなく、最後の星のお話であったり動画など、細やかな工夫によって、熱い想いを持って講話をしてくださったというのをはひしと感じました。その思いに応えなければ、と聞き入ってしまふ講演でした。川柳を読まないという工夫はどのような意図があったのか、気になりました。私達は戦争の悲惨さというものを、体験できない、でも想像してくることはできるというお話がとても印象に残っています。このような道産が残っている、残してくる意味は、わたしたちのこのようなことを繰り返さないように警告するためなのだと、改めて永続的に語り継ぐことの意義について考える機会になりました。歴史を風化させないために今を生きている私達の努力が必要不可欠なのだと、自分がその責任を担っているということも気づくことができました。
3	広島市「被爆体験伝承者」講話	対面で「被爆体験伝承者」講話は、今回で2回目となりました。前回の講話では内容を追うことに注力していましたが、今回は内容も大まかに把握していただき、講話をじっくり聴くことに集中しました。広島での講話では、情報が少ない中で混乱し、被爆していく人々という内容が強く出ていたと感じました。原子爆弾の特徴としては、やはり放射線の影響が真っすぐに挙げられ、特に残留放射線は、爆弾の爆発とは直接的につながらない影響として特徴的であると考えています。残留放射線という情報がない中で、広島において救助活動を行ったり、家族を探しに来た人々が、知らず知らずのうちに被爆していくという語りが、原子爆弾の恐ろしさの1つとして強調されているのではないかと感じました。
4	広島市「被爆体験伝承者」講話	森河さんのお母様が描いた絵本を見せただけで、森河さんの様子を知ることができ、被爆体験者が語る内容の重みを感じた。この体験を聞くことができた自分たちはさらに次の世代に伝えていく義務が生じたとも思うので、特に今後教育の現場で伝えられるようにしていきたいと感じた。最後に森河さんが仰っていた「嫌悪感を覚えるほどに伝えてほしい」という言葉が心に残ったので、忘れずにいたい。「建物疎開作業」や、「初期放射線と残留放射線」という知らない言葉も出てきて、自分の知識の無さを実感することでもできた。後世に伝えていくにはどのような手段を取ればいいのかなどを今後考えていこうと思う。
5	広島市「被爆体験伝承者」講話	森河さんのお母様と実際にあった森河さんのお母さんの体験談をお話された。森河さんの「母の平和への想いを語り継いでいきたい」という強い意志のもとで活動していられたことが分かった。森河さんのお話で印象的だったのは、工場に動員された学徒や婦人をもつて訓練していた女学生が取り上げられていた点である。このことは、教育が国民を国家に従属するための臣民の育成手段として用いられたことを意味している。日本国民が国家権力に丸め込まれていたことを学ぶことも重要であり、ここにおいて批判的思考力の育成が平和教育の重大な意義であると考えた。森河さんは、「ご自身のお母さんの平和に対する思いや原爆に対する嫌悪感を語り継ぐことを使命と捉えて活動している。私も平和を構築するためには、こうした悲慘な体験談は非常に重要である」と考える。私が森河さんに「平和とは何か」について質問すると、「想像すること」であることと答えてくださった。これまで「平和」という言葉が「平和が平和であった」と仮定して、平和を構築していくために、つまり「明日」が来るためには、戦争体験の継承に加えてどのようなことが必要なのかわかていないと思った。
6	広島市「被爆体験伝承者」講話	まずお話の中に出てきた建物疎開という言葉を初めて聞いた。しかもその作業に中学生が参加しているということに驚いた。当時、中学生が何らかの労働に従事していたという事はもちろん知っていたが、繊維産業の辛い手作業の仕事イメージしていたので、想像以上に重労働な仕事に携わっていたのだと知った。原爆によって建物疎開の作業をしていた多くの中学生がなくなってしまう事実にも非常に悲しさを感じた。また原爆が落とされた際の当時の状況だけでなく、その瞬間の感情も込められているような気がしてとても印象に残っている。教員を目指している立場からして戦争に関する授業などでは基本的には事実的に写真や映像だが、当時を想起して描かれた絵にも写真や映像にはないような教育的効果があるのではないかと感じた。 当時の中学生などから建物疎開の作業を行っていた中で被害にあったという事とがとても苦しいと感じました。お母さんが中学生の時に竹やりをもつて戦うことに何の疑問を持っていなかったという事に驚き、教育や社会の流儀は怖いと思いました。 原爆が投下されてから、一般人は放射線というものを知らずに被爆していたと聞き、原因が分からず亡くなった事実、体調が悪くなった、子どもにも異常が現れたりして、怖かったのだらうと思いたった。 お話を「自分事として考えて」、来年以降授業をする際などに戦争を伝えていきたいと思いました。

7	今回の広島原爆の話聞いて、被爆者が減っている中であって「語り」によって受け継ぐことの良さを感じることができた。去年、原爆資料館に行った時に遺品などの史料が伝えていることがメッセージもとても印象的だったが、当時の様子を森河さんの表現力や語りを通して理解することができているのが、伝承の良さとしてとても意味のあることだと思った。薄れつつある原爆の悲慘さをどう伝えていくかは、今後私の世代はよく考えなくてはならないことであると改めて感じた。また、一番印象的だったのは、「核兵器は人間によってつくられてきたものだから、人間によってなくすことができないはず」という事だった。今の核兵器が廃絶できないことは、核が敵対国への抑止力になっていて両者が必ずしもなくしてくれずには限らないからと聞いたことがあったが、この膠着状態を緩和できるのが、核の危険性や悲慘さへの理解や共感する気持ちなのではないかと思ったし、だからこそこうした活動が今の時代に重要であると感じた。
8	講話を聴いて、原爆の恐ろしさを強く感じた。爆心地の表面温度は約3000-4000度に及ぶと知り、身の回りに存在しない温度であつたため想像できなかつた。また、一瞬にして広島街がなくなくなり人々も炭の棒のように黒くつくと聞いた時衝撃を受けた。ただ一つ一つの原爆で一瞬にしてすべてが消えてしまうという状況をつくる原爆の恐ろしさを感じただけでなく、そのような原爆を今の時代も所有している国があることが脅威であると感じた。今の時代の核兵器は戦争当時の核兵器よりも威力が上がつっているため、使用されることになった場合広島や長崎の被害よりも遥かに上の被害が生じると思った。そのため、このような核兵器が使用されることのないように、今を生きている私たちが核兵器の恐ろしさを認識し、これからは生き残る人たちが伝えたいことを大切だと思った。
9	お母様の河野きよみさんの戦争体験を通して、広島に落とされた原爆の恐ろしさについて改めて認識した。平和記念公園の礎に「過ちは二度と繰り返してはならない」とある。日本は「過ち」に対するあまりにも大きな責任を負ってしまつた。二度と戦争を繰り返してはならない決意をもつとともに、過去の戦争について将来教師としてどのように伝えていくべきかを考える必要があると感じた。原爆が落とされたことは日本にも原因がある一方で、アメリカが原爆を落とされたという事実は絶対的に許されないことだと思った。日常が一瞬にして奪われてしまったのだから。きよみさんがミズーリ州の大学で講和をした際には涙を流しながら聞いている学生がいたというお話があった。国内だけでなく世界に向けて、原爆の恐ろしさや平和について、唯一の被爆国である日本が主導して伝えていく責務があると感じた。
10	「被爆者体験伝承者」講話を聴いて、写真で見せられる時とは違つて絵でしか伝わらない戦争の悲慘さを感じることもできた。一番印象に残つたのは、電車のつり革に人の腕だけが残つているという話だ。今想像しただけで、少し気がひいてしまつた場面だが、当時広島ではそのような光景が当たり前になつてしまつたことが戦争の恐ろしさだと思つた。もう一つ印象に残つたのは、「平和」とは何かについてお話しされたことだ。「平和」とは何かについて他の授業内で考えることはあつた。しかし、「平和」とは明日があるという事についてとても納得した。私たちが、当たり前に大学にきて、友達と学食を食べた後にアイスを片手に他愛もない会話をする当たり前の日常を次の日もできるという事が「平和」だととても強く感じた。当たり前の日々を繰り返して送ることができるといふ事が「平和」だと感じた。
11	森河さんによって示された広島原爆の被害の様子からは、当時の凄惨な状況が想起され、恐ろしさを感じた。この中では、人々が通常ではありえない状態になつたことが印象に残り、後世にも伝えなければならぬと考えた。加えて、提示された絵からもその雰囲気や伝わり、原爆の恐ろしさを伝えるうえで大きな効果があると感じた。
12	森河さんが、亡くなった中学生たちの無念や思いを伝えたいとお話しされたことも印象に残つた。私も将来、教育という立場から平和に関わろうと、戦争を起こさないという意識を形成するための手立てを検討していきたい。
12	本筋とは外れるが、被爆体験伝承者の制度について興味深く感じた。2年の時間をかけて、弟子となつて広島と原爆への理解を深めると知り、原爆が落とされたという事実が大きな出来事であると改めて痛感した。
12	森河さんの話を聞いていて印象的だったのは、最後にお話しされていたミズーリ州立大学での「語り」だった。全く言語や文化の違い相手に対して被爆講話をすると、あちらの大学の生徒が泣きながら謝ってくれたという話は印象的だった。このことから、少なくともその時の大学の生徒は原爆の投下を「自分達が行つたこと」ととらえていることがわかる。つまり、原爆投下に対して自分たちが加害者だという当事者性を持っていたことがわかる。こういった効果が被爆講話の副次的効果だったのか否かというのは興味深いところではあるが、もしそうであるなら改めて被爆講話の大切さを知れたと思う。
	戦争や原爆を経験したことが無い私たちのような世代は、「想像力」によって当時の様子に共感したり悲慘さを理解したりすることが重要であるという事がとても印象的だった。一方で、原爆や戦争のことを学習する直接的な機会があまりない中で、このような場が今以上に増えてくださる人が知るきっかけができて欲しいと思う。また、怖いと悲しい、戦争はよくないと思う気持ちを実際に一人一人の平和を尊ぶ価値観や生き方につながるように、学校の授業でも実践したいと思った。
	長崎市堀田さんの講話を聴いて、戦没者の一人ひとりに目を向けることが大切であることを感じた。どうしてもどのくらいの人が亡くなったのかという数に注目して、その数に衝撃を受けてしまつたが、数では一人ひとりの戦没者を見ることで戦争が奪つたものの大きさを感ずることができると思った。一人ひとりに注目することで、戦没者の家族やその後の人生、命のつながりについて考えることができる。今、自分が生きていることも戦争を生きた曾祖父の存在があるからであり、命をつなぐことがいかに難しいことであるかを改めて考える機会となつた。この命を今後もつないでいくために、戦争を二度と起こさないという意識を持ち、これから関わっていく人に戦争をしてはいけないということ伝えていく必要があると感じた。
	堀田さんのお話を聞いて、丸田和男さんが見た1945年8月9日の長崎市の様子をイメージすることができ、丸田和男さんの戦争体験を追体験できたような気がする。原爆の被害について絵画などで想像することが殆どであつたため、「黒くけ少年」の画像が出てきたときはとてもない衝撃を受けた。一瞬にして日常が奪われ、黒焦げになつてしまつたという原爆の凄まじさがありと見せつけられた。原爆は78年前の過去のことではなく、今なお原爆による被害で苦しんでいる人がいるといふことを念頭に置き、現在のこととして捉える必要があると感じた。明日が来ることのありがたさを日々噛みしめながら、将来教師として原爆の悲慘さを後世に伝えていく責務を果たしていきたいと感じた。
	「交流証言者」の講話を聴いて、原爆の恐ろしさや後世が戦争の恐ろしさや原爆の悲慘さについて考えるためにはどのようにするべきかについて考えることができた。一番印象に残つたのは、尾崎の原爆で亡くなった約21万人を紙で表したものが印象に残つた。私たちが、戦争でどのくらいになつたか聞いたときに数が多いと「ただ多いなあ」と感じるだけだつた。しかし、実際に目で数多さを確認すること、あの一つの爆弾だけでたくさんの方が犠牲になつたことを痛感した。また、私たちが今戦争を二度と起こさないためにできる事は「想像する」ことだと思つた。戦争の話や戦争の想像すること、戦争は怖いもの、大切な人の命を奪うものという事を実感していくことが大切だと思つた。教師になるうえで、戦争の悲慘さを伝えることは一つの役目だと思つたため、工夫した授業で戦争の悲慘さを伝えていきたいと思つた。
	原爆の被害を3本の毒の牙と表現したことを興味深く感じた。熟練や爆風の規模が、今までの私自身の生活とは桁違いになつており、驚いた。加えて、毒の牙という言葉は子どもに伝えるうえで印象に残る言葉だと考察した。
	また、星として表現された21万4000人の命があつたこと、その周りに取り巻く人々がいたことを忘れてはいけないと考えた。その中には母を亡くした丸田さんのような人がいることも理解し、戦争の強い影響力を痛感した。加えて、21万4000人を紙で表したこと、数字に対する衝撃度が高まつた。現代に生きていると明日があることは当たり前のことに感じてしまつたが、その当たり前ならなかつた時代があつたことを認識し、伝えていかなければならないと考えた。
	堀田さんの語り口調がとても印象的だった。半分芝居がかつているゆえに、児童生徒にとつてはとても分かりやすいのだと思う。質疑応答であつたように、あれが話し方の訓練の賜物だと感じた。また、丸田さんの体験談の中で、母の死を知つた時に全く感情が動かなくなつたという話を聞いて、非常に生々しいと感じた。身体とともに、感情や精神にまで戦争は傷を残すのだなと感じた。また、21万4千の星というのが、具体的にどんな数だつたのかというのが体験できるというのはとてもすごい取り組みだなと感じた。

	森川さんのお話を聞いて、1 番印象に残ったことは、やはり、原爆投下の次の日に広島市内に入ったことでした。森川さんのお母様きよみさんの、「姉 2 人はもう亡くなってしまったの視点からとて面白い」という思いや、「遺骨を拾うために」と翼を編むというお話の話を聞いて、当時の状況からとて面白いと大きな不安感や、原爆だに言えることでもなく空襲の恐ろしさを自分でも感じ考えることができた。また、きよみさんのお姉さんやお友達の方が亡くなる際のお言葉を聞いて、原爆や戦争の悲惨さを目の当たりにしていない自分がその体験をせずに今まで生きてこれたことへの幸せと、言葉の中に含まれた一つ一つの優しさや無念、悲しさを感じた。また、伝えていかねばならないのに、自分の無力感やたのしくことしか出来ないのかもしれないと感じた。昨年も、この被爆体験講話を受けて感じたことと考えることが沢山あったが、伝承者の方一人一人のお話はどれも伝承してくるし、伝わってくる思いや伝えたい思いも大切なのだと思うので、こういった講話や伝承を多くの人から聞き、繋いでいく行動がとても大切なことだった。森川さんのお話を聞くと、きよみさんや友達が亡くなる時でも汽車が動いているというところから、原爆を聞く限りだと、きよみさんがいた所は大きな被害がなく、翌日に汽車で行ったところも広島駅の前の駅と違うことでそこまで通っているのかなとも思ったが、先日秋田市の大雨で電車が止まったことと考えると（比較の対象として適切な対象として適切ではないかもしれない）とても驚いた。	堀田さんが語る、丸田和男さんのお話は、とても鮮明に丸田さんの当時の体験が伝わってきて、心にくるものが多い。8 月 9 日の長崎に原爆が落とされた日の朝の出来事からお話して頂き、期末テストや学校、友達と自分たちも経験して来た事柄からお話をしてくださり、とてもイメーシやすく少くも繋がりがあることとにも、その自分たちも経験していたもの、もしくは時が経つていくものが多い。そして全て破壊されてしまうことととてもショックを受けた。頭では分かっているが、一人一人のお話を聞くと、やはり、「全」にしての物語も大切だが、「一」の物語や思いもとても大切で継承していくべきものだと感じた。また、研究室の 4 年次の教員さんもお話されていたが、堀田さんのお話の仕方がとても上手で、終始引き込まれた。自分も教員を目指していく中で、「伝え方」を大切にしていきたいかと思つた。また、最後にお話された、「今」の自分たちは「当時」繋がれた「命」という言葉に、自分はいはつとさせられた。自分は、今まで聞くこと、伝えることの大切さや悲しさについて学んだり考えたりする機会はあるが、どこか他人事という過去の出来事や今の感覚が拭えないかと思う。しかし、当時の悲惨な戦時下を生き抜いた人たちがいたからこそ、今があり、確かに戦争に負け、当時の考え方ややり方について反省すべきことは多くあると思うが、日本を大切に思ってくれてくれた人たちがいたからこそ「今」、「こ」に私たちが生きていくべきことを改めて考えていかねばならないかと思つた。
13	お母様の貴重な体験と絵を見聞きし、その残酷さと非現実的な状況を想像して胸が痛くなりまし。特に、中学生が眠るようになり死んだまま積み上げられた絵を見たときには、本当に人かと、実際の現場をみたときと頭から今も離れないで大きな衝撃を受けました。戦争を語り継ぐには、3 年間の練習が必要で、最近では語り手が少なくなっているため 2 年間にわたって知ると知り危機感を覚えたこととにも、語り手の方々の年齢も決して若くはないのでこの先語り手語り手の引継ぎも増えていくのだらうと考える。そうすると、事実が事実として伝えられないことが最も恐ろしいです。親族であるからこそ聞き出すことのできた心の奥底の叫びと、その絵をこれからは若者に伝え、いつか誰かがそれをそのまま、語り継ぐ第 3 の伝承者となることを願っています。	お話を聞いているとき、大学の一室であつた部屋がまるであの日の長崎の町のようそんな錯覚を起こしそうなほどに引き込まれました。アストが終わった真夏の日、一人の少年が一瞬にして、すべてを失つた体験は痛々しく、そして恐ろしいものでした。母親を亡くしても涙が出ないほどに、心は枯れてもう自分が息をしているのが情一杯、その先もずっと被爆の放射線によって悩まされ続けてきたと知った後に丸田さんの映像を見たときは、ほっとしたというか生きていくことの素晴らしさを実感しました。私にはいま生きていて、やりたいたいことを思う存分やって、忙しさに何かを手放したくないことがあります。けれど、この時長崎や広島にいた人たちは、手放したくないすべてのものを消されました。今、自分の思うように生きることができている瞬間に感謝していくべきです。そして星の一つ一つ一つの物語を思いながら、この体験をこの先もずっと語り継いでいくべきだと強く感じました。
14	「平和というのは、明日があること」という言葉がとても印象に残っている。いつも来る毎日が当然ではなく、日常の大切さを実感した。実際に、お母様の語りの際には、当時き、被爆者の心はいつまでも苦しめられており、うめき声をあげたりと辛く、悲しそうな様子であつたことを聞かない」ということを実感した。また、「語りたくない」とは口を開かずとも、それを無理やり聞こうとすることはできない」という話から、当時の方の証言を聞くことの難しさも実感した。次世代へという「平和の意識」をつなげていくために、被爆体験と向き合うこと、そして、それを語り継いでいくという決意をもつた森河さんの強い覚悟を感じた。原爆に対する科学的な理解と当時の人々の思いに触れることで感性的な理解を深めることができた。	語り口がすばらしく、丸田和男さんの被爆体験について臨場感をもって体験することができた。原爆の三本の毒の矢について、熱線、爆風、放射線があり、放射線は、人の体を、細胞を壊しながら通りすぎでいくという説明がわかりやすかつた。「まだ 13 歳なのに…」「体中から血が噴き出てくる」など死がすぐそこまで来ていることをさまざまな感覚で感じた。また、21 万 4000 人の死者が出たことについて、数字だと軽くならしてしまい、一人ひとりが生きていた人生や家族、思い出が失われてしまふというお話に納得した。自分の家族や親戚ではなく、赤の他人の被爆体験を語ることに特有の難しさもあると考えると考えられるが、そのようなことを感じさせない講話だった。命が今、ここにつながつていくこと、先の大戦を生き抜いてきたという奇跡で私たちがここにいてということ子どもたちには考えさせる必要があると感じた。
15	お話を聞いてまず印象に残ったのは、学校で軍務が始まったときは、疑いを持たず先生の言うことを聞いたということ。真しく苦しい生活だったのが日本の勝利を信じていたということだった。そのお話の後のお話を聞き、学生を戦争に向かわせてしまふ教育の恐ろしさというものを実感した。そのお話の後に悲惨な体験を聞くと、平和教育で掲げられる「教え子を再び戦場に送るな」という言葉の重みを本当に感ずることとなった。また、戦争が終わった後のお話しというのにも心に残つており、特に被爆者への差別により、被爆体験を隠して生きなければならなかったというのは、忘れてはいけない、語り継いでいかねばならない歴史だと感じた。被爆によってつらな思いをすするのには、原爆が落とされたその瞬間だけでなく、その先何年もつらな思いをしながら生きていくことになるということを、語り継いでいかねばならないと感じた。	堀田さんの言葉で、「近い将来最後の被爆者がなくなつた」というニュアンスを聞くことになる」という言葉が非常に印象に残つた。堀田さんが丸田さんから聞いた被爆体験について、丸田さんになりきつてお話しされたり、21 万 4 千の星のギミックを用いたりして伝えてくださり交流証言は非常に印象に残るものになつたが、この交流証言を行っている背景には、近い将来最後の被爆者がいなくなり、残るものことへの危機感があることと聞き、被爆体験を継承していくことと重大な責任を実感することとなつた。交流証言の中では「八月九日に自分が生かされたことを実感する」というのが一番心に残つており、戦争が終わる数十年前、その当時戦争を体験し、被爆を体験した人々がいまだに生きているのを見ていくことを表すリアルな言葉は、この先も語り継いでいかねばならないと感じた。
16	今回の講話を聴いて、広島で起こつた原爆被害の恐ろしさや戦争の悲惨さは語りつくせないとい点からのお話を聞くことができて興味深かつた。原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さは語りつくせないといこちではあると思うが、将来を担っていく子ども一人一人に對してつらかつた考えでもおもうという気持ちを感じた。また、お母様の体験を語られたことと、今後さらに厳しくなっていくことが予想されるが、一人一人が平和について希求し、戦争がなく、平和な世界へと道を作っていくことが重要であると感じた。	今回の講話は、丸田さんに成り代わつて進めていただいた。丸田さんという今もご存命で、実際に被害にあつた方が形として残そうとしてくださったことがやはり大きいのではないかと思つた。また、当日の動きやこういった経緯でそうなるのかというところまでしっかりと再現されている。私自身、まだ長崎にはいってないが、資料でしか長崎の原爆被害に触れられない。しかし、今回の講話から、長崎に直接赴いてしつかりと学び直さなければいけないものがたくさんあるなと感じた。さらに最後に「星」という表現をしていたが、数字が軽い、というのは本当にそうだなと感じた。死者数について今の私たちは想像するしかできない。実際に数字が出てくるときに現実感が無い。私たちが考え直していくことから 平和についてより考えを深められるのではないかと思う
17		

– 108 –

24	森河さんの講和は終始胸が痛くなくなってお話でした。聞き手の私がこれだけ胸が痛いとなると、当事者の森河さんのお母さんは被爆体験を思い出すことが、どれほどの苦痛だったのかと思います。特に、町の死臭や円状に積みかねられたり、川や海に浮かんだりした遺体、電車の吊革にぶら下がる手などといった死に関する描写は想像しただけでも生々しかったです。近年、日本において周辺諸国の影響で核保有についての議論がされていますが、核の保有はもちろん核の使用で、幸せになる人はどこにもいないのだと改めて実感しました。機会があれば広島を訪れて、核の破壊的な被害から復興を果たした広島をこの目で見てみたいのです。	堀田さんの講和は丸田さんになりきっての語りはとても印象的でした。1945年の8月9日の長崎に自分がまわっているような臨場感が終始あります。語りの各所で言われた丸田さんの言葉が心に残り2度のがんととの闘病を経験し、今でも後遺症で物理的・精神的に苦しんでいる方が多くいるのと改めて実感しました。最後の犠牲者を星で表現したものは、自分の想像以上に長く、長崎の原爆で亡くなった21万4000人の重みを感じました。最後の演出はぜひ続けてほしいです。
25	広島に落とされた原爆の被害についてのお話では、「今思うと、水をあげればよかった。」という言葉が最も印象的でした。原爆が落とされた後に広島島の中心地へ向かい、ものすごい悪臭をともしなう焼け野原が広がり、無数の死体が軋がっている中で、水を求めて小さく声を出しているその状況について想像した時の感情は、言葉にするのが難しいですが、残酷さとか悲しさもあるのですが、戦争を体験していない自分にとっては、本当に人間が人間に対して行ったものなのか信じ難いものでした。当時、被爆した後の街中をさまよっていた人々は歩くしかなかったものなかもしれませんが、道路の脇に真っ黒く焼け焦げた死体や酷く火傷を負った死体を並べられている中を歩くなんで本当に自分には考えられないことであるし、当時の人々のことを考えると本当に心が苦しくなってしまう	「もし地獄があるなら、ここだと思いました。」丸田和男さんのこの言葉を聞いてから、私は落ち着いて講和を聴くことはできませんでした。学生のためにお話をしてくださった方の、丸田さんになりきったお話は自分自身の感情を大きく揺れ動かすものでした。丸田さんとお母さんとの「『いつてきます。』」「いつてらっしゃい。」というたわいもない言葉のやり取りが最後になるなんて思いもしなかった。』というお話や、真っ黒に焼けけた死体や人の形をしていない死体が軋がっている地獄の世界で、しかもまだ13歳で、これからどうすればいいかわからないし、心の支えであるはずのお母さんもないし、一瞬にして全てを失ったことのお話は、心苦しくてお聞きするだけで自分一杯でした。しかし、講話の最後にお話ししていた、学生ができることとして「とにかく想像すること」のきっかけを与えてくれたものでした
26	今回の講話は、広島・長崎を訪れたことがない私に、戦時中の悲惨な被害について多くのことを考えるきっかけを与えてくださいました。今回、原爆の被害にあった方々が何を体験し、見て、辛く思いをされていたのかをはじめ具体的に想像しました。情報が無い中で懸命に家族を探す人々、負傷者を手当てる医療関係者、亡くなった方に関わる仕事をした兵士など、教科書にはあまり掲載されない原爆投下後の細かな人々の動きが伝わってきた。戦争の恐ろしさという漠然とした知識ではなく、自分の身に起こったようなかといったら自分事として考えることができました。終戦後、日本は目覚ましい発展を遂げましたが、その陰に被爆者に対する差別や偏見が蔓延していたこと、そして今でも知識不足からその認識が変えられていないことにとっても情けない気持ちになりました。私もお話をきっかけに放射線と遺伝について調べました。	堀田さんのお話にあつた、「広島・長崎に投下された原子爆弾の被爆者の診療と健康管理を目的として開設され」た長崎原爆病院が、今では多くの病気の療養に対応していて、地域の病院となっていることを初めて知りました（引用：日本赤十字社長崎原爆病院 HP）。丸田さんの被爆体験は、原爆が落とされた当時の瞬間を体感させるような具体的な内容でした。特に丸田さん、お母様が即死だったと聞いたとき、涙や悲しさといった感情表現ができるほどの気力がなかつたというお話がとても印象に残っています。これまで原爆の学習をしたとき、人々の深い悲しみを想像していましたが、それ以上に心に傷を負うものであることを学びました。丸田さんのお母様のお体は丸田さんの元へ帰ってこられていますが、多くの人々は遺骨もないままだと知りました。毎年の平和記念式典の意義も改めて重く受け止めたいと思います。右のグラフは、NHKが行った原爆に関する意識調査(2015実施)の結果の一部です。今回のご講話をきっかけに、全国の正答率の低さを知りました。このような現状を改善していくのも教員の役目であると感じました。

- ・2023（令和5）年7月26日の講話直後に記入してもらったアンケートから作成。
- ・原文全部掲載。文字強調筆者。本文中の引用箇所を強調した。

資料12 令和5年度養成研修のスケジュール例（家族伝承者）

区分		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
R5年度	募集		↔											
	講義				↔			↔						
	被爆体験等の伝授				↔									
	伝承講話原稿の作成				↔									
R6年度	伝承講話原稿の作成	↔												
	視覚資料(パワーポイント等)の作成 (講話に視覚資料を使用する方のみ)				原稿が完成した後で、視覚資料を作成していただきます。 作成した視覚資料は平和推進課で確認します。					↔				
	(講話原稿作成後) 講話実習(2回) 検定講話(1回)								↔					
									1回目		2回目		3回目	
	家族伝承者の認定			証言者一人の伝承につき概ね3回講話実習を行います。R7.3月上旬までに実習を終え、 伝承者として認定されると、R7.4月から伝承者として活動開始する見込みとなります。									★	
R7年度	家族伝承者として委嘱 (活動開始)	★												

上記日程は2年間の研修スケジュールの一例です。

必ずしもこの日程で研修を進める必要はありませんので、あくまでも目安としてご覧ください。

原稿の完成について期限は定めておりません。活動開始を希望する時期やご自身のご都合に合わせて、原稿を作成してください。